

犠牲の道

百日紅 董

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アインクラッドに流れる一つの噂話。

曰く、その姿を見た者はなく。

曰く、影すら捕えることはできず。

付いた異名は『絶影』。

アインクラッド最速の名を持つプレイヤーは、仮想世界に希望を見た。

目次

プロローグ	
プロローグ1	絶影
プロローグ2	噂話
前編	
1話	邂逅
2話	黎明
3話	往日
4話	悲願
5話	失考
6話	光明
7話	共闘
8話	犠牲
9話	絶望
	88
	73
	62
	54
	46
	33
	27
	18
	6
	3
	1

プロローグ プロローグ1 絶影

1

手に持った大振りのサバイバルナイフを持ち直し、眼前に迫る武装した骸骨を見据える。

目の前に存在する邪魔者が直剣とラウンドシールドを構え、僅かに足を引いたその瞬間。骸骨と対峙していた小さな影が掻き消えた。

5秒。

この世界から抜け落ちたように、誰にも存在を知覚されない時間を終え、影は再びその姿を現した。

無数に切り刻まれた骸骨はポリゴン片となり、影が進んできた道を美しく彩っていく。小さな影はその景色を振り返ることも無く前へと進む。握っていたナイフは既に腰の鞘へと納められていた。

口元を覆うマフラーを鼻先まで持ち上げて、小さな影は歩いていく。

隠蔽スキルを発動し、誰からも認識されない影。

攻略組にも、情報屋にも、存在だけを示唆される幻影。

大柄な男であるとか、小柄な女性だとか。使用する武器は両手剣だとか、斧だとか、細剣だとか。根も葉もなく、当然、根拠も無い噂話ばかりが横行する中で唯一確かな情報は、この世界。アインクラッドに生存する全てのプレイヤーの中で、誰よりも『はやい』ということ。聖騎士、ヒースクリフのような堅牢さは無く。

黒の剣士、キリトのような攻撃力は無く。

閃光、アスナのような精確さは無く。

けれど、噂話の幻は、何よりもはやかった。

速度も。剣速も。何物にも影すら捕らえられないその幻は『絶影』と呼ばれ、全てのプレイヤーから畏怖される存在だった。

下層、中層に存在するプレイヤーからは、その強さを。

職人クラスのプレイヤーからは、そのアイテム収集や情報の速さ

を。

攻略組のトッププレイヤーからは、速さを強さに結び付けるその技量を。

そして、ゲームであつて現実であるこの世界で、殺人を愉しむレツドプレイヤーからは、その存在そのものを。

全てがデータの世界で、幻と呼ばれる存在に怯えることが、どれだけ滑稽か。

しかしそれでも、人々は恐れ戦き、しかして希望を見出す。

恐れられる程にはやい幻影は、そのはやさを向けるべき相手を定めている。

それ故に、幻の絶影は畏怖される存在であるとともに、この絶望すべき窮地において、生きる希望とされているのだ。

誰よりも速くモンスターを殺し尽くし、レツドプレイヤーを屠ってきた。

その幻影の存在を確かなものにした伝説的所業が、たった一人でフロアボスを攻略したというもの。

誰かが見たわけでもないが、いつの間にか攻略されていたフロアが、絶影の存在を証明している。

絶影。

影すら捉えることのできない『はやさ』の化物。

ゲームであつても、遊びではなくなったこの世界で、その影は何を望む。

プロローグ2 噂話

2

「絶影？」

「ああ。53層の件、憶えてるか？」

アインクラッド50層、アルゲードの主街区の裏路地にある雑貨屋に、黒ずくめの剣士の姿があった。目の前にはスキンヘッドの強面の巨漢が、カップに紅茶を注いでいる。ポットを置いて、ソーサーに乗せたティーカップを剣士の前に置いた。

「ああ、いつの間にか攻略が終わっていた層だろ。攻略組が血眼になって攻略者を探してたけど、結局見つからなかったんじゃないか？」

デスクゲーム、ソードアートオンラインの攻略は現在、攻略組と呼ばれるトッププレイヤーが集めた情報を基に作戦を立て、レイドと呼ばれる大部隊でフロアボスを倒している。その陣頭指揮はトップギルド血盟騎士団の団長か副団長が行っており、攻略した人物が不明であることは基本的にない。

ただ、最前線が60層である現在、唯一の例外が53層。

フロアボス攻略ではラストアタックボーナスが出現し、そのドロップ品はゲーム内でも一品物であるユニークアイテムであることが多い。ゲーマーというのは特性上、妬み嫉みの中でも特別を持つと自慢したがる傾向にある。

だからこそ、フロアボス攻略という偉業を成し遂げたにもかかわらず、攻略者が名乗り出なかった53層の攻略は謎に包まれていたのだ。

「まさか、攻略した奴が見つかったのか？」

「見つかった訳じゃないんだがな」

「さっき言ってた絶影、ってやつか」

「噂だけは前から流れてたんだが、今回の騒動で確かに存在するプレイヤーだったのがわかったんだ」

「だけどそんな奴、攻略会議でも見たことないぞ……って、今回の騒動

？」

「あ？知らないのか？」

そうして雑貨屋の店主、エギルがアイテムストレージから出現させたのは一枚の羊皮紙。情報屋が発行する情報誌だ。それには二種類あり、定期的に発行するものと、フロアボス攻略などの大きな事態があった時に発行するものがある。今回は後者のようだ。

「60層攻略!?1時間前に61層のアクティベートまで…!」

「鼠が持ってきたから正確な情報の筈だ。ただ、見てほしいのはその写真だ」

「写真？」

エギルが指で示したのは一枚の写真、に映る小さな人影。

「なんだこれ？プレイヤーか？」

「ボスモンスター撃破直後の写真だそうだ」

「直後、って一人しか映ってないぞ」

「それが絶影、らしい。アルゴが見た限りでは、ボス攻略も一人でやったらしいぞ」

「フロアボスを、たった一人で…?!」

迷宮区は洞窟のようになっていて、フロアボスの守護する部屋は大體薄暗い。

そのせいで写真も見づらくなっているが、ボス部屋には羽織を纏った一人分の影がある。アルゴの弁によれば、彼女がボス部屋に着いたときには既に戦闘は始まっていて、そこから2時間近く経った写真がこれだそうだ。

「武器は不明、装備も不明。ボス戦中はスキルエフェクトも無かったそうだ」

「な、なんだそれ。たった一人で、ソードスキル無しにボス攻略したつてののか？」

それが本当ならば、絶影と呼ばれるこの影はSAO中最強のプレイヤーということになる。

この世界で唯一のユニークスキル、神聖剣を持つ血盟騎士団団長のヒースクリフでさえフロアボス攻略にはレイドを組んで挑んでいる。

HPゲージがイエローになったところを団員ですら見たことが無いという不敗神話も大概だが、フロアボスソロ攻略などそれ以上の伝説だ。

黒ずくめの剣士、キリトは絶影と呼ばれる影が自分と同じβテスト出身者ではないかと考え、即座にその可能性を切り捨てる。

テスト期間中に誰よりも攻略を進めたのは、他ならぬキリトだ。そんな自身でさえ為しえることのできない偉業を為せる程の実力を持つプレイヤーはいなかった筈。まったりプレイをしていたとしても、それはテスター以外のプレイヤーと同じという意味ではない。

いや、問題はそこではない。

これほどの実力を持つプレイヤーが何故、今までボス攻略に参加しなかったのか。何故、たった一人でボス攻略などという無謀ともいえる偉業を為したのか。

「……こいつが何処にいるか、わかるか？」

「わかってりやアスナが勧誘してるだろ」

「それもそうか……」

二人の脳裏に攻略の鬼の可憐な姿が浮かぶ。

「いい話も聞けたし、俺はそろそろ行くよ」

「おう。また宜しくな」

飲み干したティーカップをソーサーに置いて立ち上がる。

ビーターとして強く在れと自身に課したキリト。

この世界唯一とされるユニークスキルを持つ生ける伝説ヒースクリフ。

攻略を強引にでも推し進める攻略の鬼たるアスナ。

現在の攻略組におけるトッププレイヤーをも打倒しうる程の実力を持つ、絶影と呼ばれるプレイヤーに、生粋のゲーマーであるキリトが興味を抱かない筈もなかった。

前編 1話 邂逅

3

青い影が弾丸のような速度で駆け抜ける。目の前にポップした三体のモンスターをすれ違いざまに9回切りつけ、死亡エフェクトのポリゴン片を巻き上げて駆けだした。

神業ともいえる瞬殺に驚きながらも、その影を追う人物が二人。

一人は情報屋、鼠のアルゴ。黄色のマントに三本髭が特徴的な彼女は、アインクラッド内で最も優秀な情報屋であると同時に、あらゆるプレイヤーの情報をも扱う最悪の出歯亀ともいえる。その最大の武器はアジリティ特化のステータスであり、自分で豪語するだけあつて速度だけならば攻略組に匹敵するレベルだ。

そんなアルゴに雇われたのが並走する攻略の鬼、アスナだ。攻略組トップギルド、血盟騎士団の副団長を務め、閃光の異名を持つ彼女は攻略組でも最速に位置する人物だった。

「くっ、速すぎる……!」

「オイラじゃもう追い付けないヨ!アーちゃん、後は頼ンダ!」

「はい!任せてください!」

迷宮区で青い影を見つけたのが5分前。そこから二人で声をかけようとした瞬間から始まった鬼ごっこは、徐々に突き放されてきている。

アルゴのスピードが攻略組に匹敵するとはいえ、その攻略組で最速のアスナがアルゴに合わせていては意味が無い。へばったアルゴを置いてギアを上げたアスナは、栗色の長髪を靡かせて青い影を追う。それでも距離は縮まらないが、何とか見失わずに済んでいる。

始まりはアルゴがアインクラッド60層攻略の一部を見届けたことからだ。

情報屋としてフロアボスの攻略情報を集めるため、高レベルの隠蔽

スキルと自慢の逃げ足を武器に最前線の迷宮区へ単独で潜ることにした。徘徊し、ポップするモンスターを避けに避け、小一時間で辿り着いたのは、既に扉の開いているボス部屋。

ボス攻略のための情報収集中に、既にボス攻略が始まっているとなれば覗くのは当然のこと。そうでなくても、ボスの姿を見ておいても損はない。

だが、ボス部屋の中で行われていたのは攻略などではなかった。

フロアボスと思われる巨大なモンスターが、何かに襲われている。アルゴの眼では追えない速度でボスモンスターに傷をつけている何か。分かるのは、ボスの体にただただダメージエフェクトが増え続けている状況だけ。

一方的な虐殺。

ボスの振るう巨大な刀は何かに当たることも無く、傍から見ればチャンバラでもしているかのようだった。

アルゴの目に映ったボスの素振り。2時間続いたそれは、唐突に終わりを迎えた。

ボスの部屋に充滿するポリゴン片。部屋の中央には『C o n g r a t u l a t i o n s !』の文字が浮かんでいる。

それが示すところは、このフロアを守護するフロアボスが消え去ったということ。見えない何かに、強大なボスが倒されたということだ。

理解が追い付かない。

S A Oのボスは、通常モンスターとは比較にならない強さと耐久値を持つ。少なくともHPバーは3本以上あり、攻撃が掠れば致命傷になり兼ねないのがその証拠。だからこそ、大盾を持つタンクが攻撃を弾き、アタッカーがその隙を突く。攻撃を受ければ回復の為にローテーションを回し、大人数で最も安全な策を取り続ける。それがボス攻略のテンプレートになっていた。

だが、目の前で行われていたのは、攻略とも呼べぬものだった。

「誰、なんだ……？」

ボス部屋の敷居を跨ぐように、一步。

それ以上は入れなかった。
何故か。

「……ッ!？」

ボス部屋の中心にいたのは一つの影。ポンチョのような、マントのような、足先に向かって広がる衣服系の装備をしていること以外、何もわからない影。

その影が僅かに振り向き、暗闇の中で見えた瞳は、暗闇以上に暗かった。見つめていると吸い込まれそうで、全てを敵視しているかのように濁った瞳。

その瞳に竦み、硬直して、怯えている時間をアルゴは覚えていない。ただ、見ていたはずの影が唐突に消えたことを覚えている。

煙のように、ではなく。イリユージョンみたいに、でもなく。

初めから誰もいなかったように、消えていたのだ。

そこからのアルゴの動きは早かった。

驚きに浸っているのも束の間。影が消えた理由を隠蔽スキルとアジリティ特化のビルド故だと判断したアルゴは、ボス攻略者に直接話を聞くために探索を開始する。

その過程で、知り合いのどこるかアインクラッド最速のプレイヤーであるアスナに声をかけることにした。

攻略の鬼であれば、たった一人でボス攻略ができるプレイヤーの存在を知れば格安で協力してくれるだろうとの打算もあった。

結果は御覧の通り。

幻の絶影を必死になつて追う閃光を見届ける。

彼女にも絶影を追う理由があるようだが、アルゴはそれを知らない。
い。

だからこそ、彼女たちは絶影を追っている。絶影と呼ばれるプレイヤーを知るために。

岩陰に座り込んだアルゴは、右手を振るつた。

速い。

青い影を追うアスナの率直な感想だった。視界の端に捉え続けるのがやつとで、駆け抜ける道先にポップするモンスターを影が倒してくれることに、正直助かっていた。

アスナにとつて、絶影はただの噂ではなかった。

血盟騎士団は今でこそ巨大トップギルドとして名を馳せているが、設立当初は十人にも満たない小規模ギルドだった。当時から団長のヒースクリフは頼れる存在だったが、完璧な人間は存在しない。

4人パーティで迷宮区のマツピングをしていた時。ヒースクリフとアスナを含めたそのパーティは、パーティメンバーの判断ミスでブービートラップにかかってしまった。

只管にリポップし続けるモンスターを相手に、四人は背中を合わせて奮闘した。幸いにも一体一体の強さは問題視するほどではない。問題なのは、その量とリポップするスピードだった。開けた場所であるにもかかわらず、突破口すら見えないモンスターの大量。

誰か一人でも崩れたならば総崩れもあり得るその状況に、絶影は現れた。

現れた、という表現は正しくないかもしれない。

モンスター群の外側から、影すら残さない速度で狩り尽くし、言葉を交わすことも無く通り過ぎていった台風のような存在。

数体のモンスターを残して過ぎ去った影は、噂通りの青い影だったことを覚えている。

その時の感謝を伝えねばなるまいと、アスナはアルゴの提案に乗った。当然、アルゴが睨んだ通り、絶影の攻略組への勧誘も目的の一つではある。

近頃は攻略のスピードも落ち、攻略組全体に弛緩した雰囲気漂いつつあった。血盟騎士団を始め、聖龍連合、風林火山等々、トップギルドの中でも攻略を急ぐ者が少なくなっていた。特にアスナの気を立てているのが、ソロで活動するトッププレイヤーである黒の剣士。プレイヤースキルはヒースクリフにも匹敵しうる、攻略組のキーマン。だが、どこか飄々としていて、まるで散歩でもするかのように最前線に潜り、圏内とはいえ野原で昼寝をする姿がどうにも癪に障る。

必死さが無いというか、強さに対して言動の緩さが目立つ。

だからこそ、絶影と呼ばれる幻のプレイヤーを欲している。

たった一人でのボス攻略。SAO最速のプレイヤー。影さえ捉えることのできない存在を攻略組に迎え入れることができたなら、きつと起爆剤になってくれるだろうと。

所詮、攻略組に属するほとんどのプレイヤーはゲーマーだ。自分より強い存在が現れれば、多少は必死さを取り戻してくれるだろうと考えた。

息をする必要も無いが、アスナは短く息を漏らす。ゲームの中でなければ、全力疾走を十分も続けることなど不可能だ。

それを目の前の影は続けている。ならば、自分が負ける訳にはいかないと、全力のペースを引き上げる。

絶影と閃光。

二人の鬼ごっこは、迷宮区から出た森林エリアのとある場所で終わりを迎えた。

圏外での安全エリアを示す半透明のドームを抜けた先にある一軒のログハウス。明らかにNPCのクエストフラグが建つタイプの建物だ。丸太を並べて作られた扉が、ギイと音を立てて開く。

「あ……」

中から出てきたのは、浅葱色の羽織を纏った和装のプレイヤー。腰には短剣サイズの武器が鞘に納められている。

あの時、自分たちを助けてくれた幻影。さっきまで追いかけていた絶影の姿かたち、カラーリングと一致していた。

「あのー」

持ち前の速さで逃げられる前にアスナはそのプレイヤーに声をかける。息も絶え絶えになりながら近づいてみれば、男か女か見分けがつかない顔立ちをしていることに気づく。黒の剣士ことキリトも女顔だったが、その比ではなかった。穏やかそうな垂れ目に、暗く濁った瞳。そしてポニーテールにした金糸の髪。女性と見るには少しばかり違和感のある袴の着方をしていなければ、間違いなく女性として声をかけていただろう。

ともかく、アスナは絶影の噂が出現してから、当の本人に接触した初の人物となった。

「……僕に何か用？」

「その、あなたが絶影、でいいのよね？」

「ぜつえい？なにそれ」

あ、と小さく漏らす。

絶影とはあくまで噂話の中での通称。正式なプレイヤーネームではない。

「えっと、60層のボスを単独撃破したのはあなたで間違いない？」

「ん、それなら僕だよ」

「そう。私はアスナ。血盟騎士団で副団長を務めています。今日はあなたにお願いがあつて伺いました」

ログハウスに入るための階段を降りてくる絶影に、ようやく息を整えたアスナは本題を伝える。

感謝よりも勧誘が先になってしまったのは、攻略組の陣頭指揮をとっている責任感からだろう。

「お願い、ね」

「ええ。あなたの力を攻略組に貸していただけませんか？たった一人でフロアボスを倒せるあなたの力があれば、攻略のペースももっと早くなる」

「……」

目の前までやってきた絶影はアスナより小さく、顔つきも幼いことに気づく。キリトと同じか、それよりも年下に見えた。

こんなにも小さな子供が現在最強のプレイヤーで、そんな子供に頼らなければならぬとは。自身の力不足もそうだが、攻略組の大多数を占める大人たちの不甲斐なさに憤ってしまう。この絶影と呼ばれる子供がたった一人で凶悪なフロアボスと戦っている間、のうのうと圏内に居たなんて。許されざることだろう。

だが、それでも絶影の力は絶大で。たった一人でボスマンスターを倒せる人間が、比較的安全且つシステムチックにボスを倒す攻略組に加入すれば、互いにとっていい結果になるだろうとアスナは考えてい

た。

「二つ、聞いてもいい?」

「え?ええ」

「なんで僕に声をかけたの?知り合いでもない、名前も知らないプレイヤーを探すより、中層にいるプレイヤーの育成をした方が早いと思うけど」

その問いに、アスナはすぐに答えた。

考えるまでもない。

「あなたの力があれば、今の攻略組の士気は上がる。士気が上がれば攻略ペースも早くなるし、中層プレイヤー達が攻略組に参加することを目指すかもしれない。結果的にゲーム終了までの期間が短くなることだって考えられる。あなたには、それだけの力があるのよ」
絶影の名は、それだけの価値があるのだ。

「……そう。じゃあもう一つ」

「はい」

「貴女は何のために攻略組にいるの?」

アスナは一瞬だけ声を詰まらせた。

その問いに対する回答は、一つ目よりも簡単だ。何故なら、このゲームがデスゲームと化したその時に、ゲームマスターたる茅場明彦からその命題に対する回答を与えられているのだから。

誰もが現実世界に帰りたいと願い、その想いを背負って最前線で戦う者達。それが攻略組。

「それは、帰るため、です。あなただってそうでしょう?このゲームをクリアする以外に、現実世界に帰ることはできない。だから強くなつて、ボスを倒し、この城を上り詰める」

その回答は、誰が聴いても満点だった。この世界を創造した茅場の回答そのものと言ってもいい。

模範解答を聞いた絶影はうんうんと頷き、真正面からアスナに言う。

「そっか。それを聞いて安心したよ」

「そう?なら……」

「僕と貴女たちの目的は違うみたいだから、協力はやめとく。邪魔はしないから」

拒絶。

想定していたものと真逆の回答に、アスナは困惑する。

誰だつて命は惜しい。回復ポーションに回復結晶、あらゆる戦闘スキルに、より硬い防具、より強い武器。死なないために装備を整え、命を守り守られるためにパーティを組み、ギルドを作る。圏外が危険であるというのは言うまでもないことだが、その中でもより死が濃密で身近な場所が、フロアボスが守護する部屋だ。

今でこそシステムチックにボス攻略が行われているが、第25層、50層では少なくない犠牲を出し、それ以外のボス戦でも度々犠牲者を出してきた。SAOが始まって以来、自殺者を除けば最も高い死因でもある。フィールドのモンスターやブービートラップ、レッドプレイヤーによるPKよりも遥かにプレイヤーを殺してきた。

ただ、どれだけ恐れようとも、このデスゲームを攻略する上で避けては通れない死の部屋でもある。

だからこそ、互いの命を守るための提案でもあったのだが、断られるとは。しかも、目的が違うという言葉の意味も分からない。

全SAOプレイヤーの目的は、生きて現実世界に戻ることに。

そう疑わないし、真実、それ以外にあり得ない。数少ない例外と言えばレッドプレイヤーのギルド、ラフィンコフィンくらいだが、彼らはカウントしなくていいだろう。

ともかく。

アスナは困惑し、焦るように聞き返す。

「も、目的が違うってどういうこと？現実の世界に帰りたくないの？」

アスナの隣を通り過ぎようとする絶影の肩を掴んで引き留めた。

「そうだね。SAOがデスゲームになっていなければ、帰らざるを得なかっただろうけど」

ピタリと足を止めた絶影は、振り向くこともなく答える。

ネットゲームの暗黙の了解として、リアルな情報を聞かない、というものがある。理由は言わずもがなであるし、ゲーマーではないアス

ナも理解はしている。

絶影の答えの真意はリアルにこそであると判断したアスナは、深く聞くことを諦め、手を放す。

「もういい?」

だが、今は個人の事情を鑑みる場合ではない。

たった一人ここに残りたいと言っても、それ以外の多数は現実世界に戻るために戦っているのだ。

力を持つ者は、それを弱者の為に振るう義務があるとアスナは考えている。ましてや、この状況。一人の我儘より優先すべきことがあると思うし、実際、このゲームを終わらせたくないと思いつつも攻略に参加している大人もいるはずだ。

ならば、自分がすべきことはただ一つ。

「あなたの事情は理解しました。ですが、こちらも命を賭けて、全プレイヤーの為に戦っています。トッププレイヤーたるあなたにも、その義務があります」

「……」

「だから、私とデュエルをしなさい。あなたが勝てば諦めます。ですが、私が勝てば攻略組に参加してもらいます」

あまりにも一方的な宣言。互いの同意によって成り立つデュエルをするには不釣り合いな言葉。絶影がポップアップされたウィンドウの拒否ボタンを押してしまえば、アスナの宣言するデュエルは始まることも無く終わる。

自身の事情を優先するなら、絶影はこのデュエルを受けるべきではない。

だが。

「……わかったよ」

絶影の指は、赤い丸のボタンをタップしていた。デュエルの成立とともに60秒のカウントダウンが始まる。

絶影から距離を取ったアスナは腰に差した細剣を抜き放つ。水晶のような色合いのレイピアは木漏れ日を反射して輝く。白い団服に美しい細剣。聖騎士をリーダーとする騎士団に相応しい出で立ち

だった。

対して絶影は、浅葱色の羽織の中。腰にぶら下げている鞘から短剣を引き抜く。柄から切っ先まで真白な片刃の短剣は、明らかにレアドロップ品だろう。

レイピアを引いて構えるアスナと、短剣を逆手に持つて棒立ちする絶影。

普段なら、デュエルの相手が棒立ちでいればやる気がないと見なし、激昂するだろうが、相手は絶影。油断などできるはずもなかった。

緊張を理性で押さえつけ、鼓動と合わせて減っていくカウントを見つめる。残りが5秒になったところで、もう一度絶影の姿を見る。突っ立ったまま短剣を持つているだけ。構えもなく、ソードスキルの発動はおろか、動き出しも遅れてしまおうだろう。

デュエル開始と共に近づいて、最速のソードスキルでスピードをブースト。絶影が動き出す前に決着をつける。

脳内で組みあがった最善策を信じて、地面に触れる足裏に力を籠めた。ジャリ、と音を立てた瞬間、電子音が鳴り響き、決着がついた。「動いたら首が飛ぶけど」

一瞬たりとも目を離したりはしなかった。瞬きだっしてしていない。それだと言うのに、絶影は一瞬だけ姿を消し、その存在に気づくよりも前に、アスナの首元に短剣の刃をあてがっていた。

目前で半身になり、伸ばした腕の先では順手で持った短剣の切先がアスナの喉に触れている。最早、『はやさ』がどうのという次元の話ではなくなっていた。

動き出しも、移動しているところも、武器を持ち替えた瞬間も。何もかもが見えなかった、感じなかった、理解できなかった。攻略組の中でも自他ともに認める程の速さを持つアスナのプライドが傷つくよりも早く、絶影はアスナに敗北を与えていた。

「僕の勝ち、でいいよね？」

手首のスナップだけで逆手に持ち替えて納刀する。デュエルのシステム上、敗北宣言を行うか、デュエルのモードに則った決着をつけない限りデュエルは続く。つまり、目の前で無防備な絶影に一撃を与

えれば、アスナの勝利となるのだ。

だが、そんなことができるはずもなかった。

完全な敗北。圧倒的な実力差を前に、動くことすらできなかった自分に目を瞑って、まだ負けていないと吼えることなどできない。自分に嘘を吐けないアスナには、敗北を認めるしか選択肢が無くなっていた。

「り、リザイン……」

「ん。じゃあ僕は行くよ。攻略、頑張ってね」

二人の間に現れた勝敗を告げるウィンドウを見ることが無く背を向けて去っていく絶影。

ようやく会えた幻のプレイヤーに感謝を伝えることも忘れて、何もできず、何もわからず、ただ居るということと、そのはやさを知っただけ。得られたことは何も無い。

また会おうにも、今回の接触は偶然の産物だ。アルゴの追跡能力とアスナのスピード、絶影自身がクエストをこなしていたことが重なり、ようやく起こった奇跡。

せめて。せめて、絶影に関する何かを得なければ。次のチャンスに繋げるために。

「ちよつと待ってー！」

安全エリアから出ようとする絶影の足が止まる。

「まだ何か？」

「あなたの名前を覚えてくれない？できれば、フレンド登録も」

フレンド登録ができれば、互いの位置を追跡できる。偶然ではなく、確信をもって出くわせるというわけだ。

「……ヴィクティム。僕の名前。フレンド登録は嫌だけど、名前くらいはね」

「ヴィクティム……ありがとう。また、会えるかしら？」

「さあ。最前線にいるつもりだけど、会えるかどうかは貴女の速さ次第じゃない？」

「そう。それなら、また会いましょう」

僅かに微笑んだ絶影改め、ヴィクティムを見送る。先ほどから変わ

らない速さで駆けだしたヴィクティムは、金と浅葱の尾を引いて安全エリアから出ていった。

絶影。SAO最速のプレイヤー。その正体は、ヴィクティムと名乗る性別不明の子供。操る武器は片刃の短剣と、伝説のように囁かれる目にも止まらない『はやさ』。

スズメの涙ほどの情報だが、現時点においてヴィクティムに誰より詳しいプレイヤーはアスナだ。

だからこそ気付いたのかもしれない。

ヴィクティム。

『Victim』と記されるその意味は、犠牲。被害者や、人身御供といった意味の英単語。

何故それを名乗ったのかは知らないが、兎にも角にもアスナの次の行き先は決まった。

「アルゴさんのところに戻らなきゃ」

自身のトップスピードで駆け抜けてきた道を、今度はゆっくりと歩いていく。

2話 黎明

4

それからというもの。

アスナは最前線でレベリングを兼ねてヴィクティムを探し続けた。数日に一度遭遇できるかどうかではあったが、その間も只管にフレンド登録と攻略組への勧誘を続け、どうにか前者の約束を条件付きで取り付けることに成功した。

「それで、条件つてのは？」

場所は第50層主街区アルグードの裏通り。ぼったくり店主と囁かれる斧使いエギルが営む商店の2階。彼と仲の良いメンツが集うのによく利用している部屋で、アスナを含めた攻略組の数人が集まっていた。

血盟騎士団のアスナ。黒の剣士と呼ばれるキリト。情報屋のアルゴに、共通の友人であるリズベットと店主のエギル。

誰もが攻略組の中でも名を馳せる人物だが、中でもキリトの実力は攻略組でもトップクラスで、高い筋力値と敏捷値から繰り出されるソードスキルは、キリト自身のスキルへの理解も相まってSAOでも一二を争う攻撃力を誇る。

何故そんなメンバーが集まっているかと言えば、絶影ことヴィクティムについて進展があったからだ。

「今度、ラフィンコフィン討伐作戦があるでしょう？その情報を渡してほしいっていうのよ」

「ラフコフの情報？」

ラフィンコフィンと言えばSAO最大の殺人ギルドだ。圏内での睡眠PKを始めとし、様々な殺人方法を編み出してきた。

ゲーム内での死が現実の死に繋がる、このデスゲームで。

普通だったら躊躇うプレイヤーへの攻撃も、躊躇することなく実行する。故に、フィールドではモンスターに並ぶ脅威として恐れられていた。

だが、そんな彼らのアジトが発見されたのを切っ掛けに、討伐作戦

が組まれた。犯罪を犯したプレイヤーのカーソルはオレンジ、殺人を犯した者はレッドに変わり、彼らは圏内に入れなくなる。その為、発見されたアジトは圏外のとある洞窟内にある安全エリアだった。

そこへ攻略組の精鋭で奇襲をかける。

いくらPK集団と言えど、最前線でレベリングをしている攻略組にステータスで勝てる訳も無く、圧倒的な実力差を以てラフコフのメンバーを全て第1層にある監獄エリアに連行する算段なのだ。

ヴィクティムは、その情報をフレンド登録の条件に突きつけてきた。

それが意味するところは分からないが、討伐隊の彼らが疑わしいと思ってしまうのも道理。

「まさか、絶影がラフコフのメンバー、ってことはないよな？」

「それは無いわ。情報って言っても、アジトの場所だけが知りたいって言ってたから」

「襲撃の時間とかを知りたいわけじゃないなら、ラフコフのスパイじゃなさそうね」

何故ヴィクティムがラフコフのアジトを知りたがっているのかは分からない。けれど、今までの噂話や、実際に会話をしたアスナは思う。ヴィクティムはオレンジプレイヤーではない。ましてラフコフのメンバーなどあり得ない、と。

「それで、アーちゃんはどうするンダ？」

「一応、団長には相談したんだけど、私に一任するって」

「ピースクリフなら言いそうだな」

「はい。だから、次会った時に伝えようかと思ってるんです。ただその前に、皆にも意見は聞いておこうと思って」

「アスナが決めたなら誰も文句はないだろうぜ。ただ、襲撃の日はずらした方がいいだろうな」

「アタシはそもそも作戦には参加しないし。アンタたちが無事に帰ってこれるような作戦にしなさいよ」

「俺も部外者になっちまうから、リズと同じ意見だな」

エギルがリズベットの言葉に同意すると同時に、一階の商店のベル

が鳴った。扉の開閉と共に音が鳴るため、客が来たのだろうとエギルは断りを入れて席を立つ。

「そんじゃあ、聖竜連合にはアタシから言っておくヨ。情報料の取り立てもあるしナ」

「あ、あはは。ありがとうございます。それじゃあ私は行きますね」
アスナとヴィクティムがフレンドになれば、ヴィクティムが最速で手に入れた情報を得ることができるかもしれない。攻略組に参加してくれる可能性も高くなる。

そんな思惑もあつたが、何よりも全員が思ったのは、ヴィクティムを追いかけるアスナの雰囲気は日に日に柔らかくなっていることだった。

自分よりも小さな子供が危険な最前線にいるからか、まるで姉のよう心配しているアスナ。その姿は攻略の鬼とはかけ離れていて、だからこそこうして攻略組の一部のメンバーと親しい関係を築くことができています。

けれど、アスナと親しいこのメンバーは、ヴィクティムと関わるアスナの雰囲気が変わっていくのと同時に、得体のしれないプレイヤーと関わるのが心配だった。SAOがVRMMOである以上、現実世界で友人でもない限り、隣にいるプレイヤーなど得体のしれない人物でしかないが、気心が知れているというだけで安心感はある。

ただ、ヴィクティムにはそれが無い。

絶影の噂話を知るプレイヤーは「ごまん」というが、その正体がヴィクティムであることを知っている人数は両手の指で数えられる程。さらに、その顔を見て、その人物がヴィクティムであると判断できるプレイヤーは、現状ではアスナくらいなものだ。

アスナに続いてエギルの商店に降りた一同は、客を相手に交渉しているエギルに声をかける。

「エギル、俺たちはそろそろ行くよ」

「部屋、貸してくれてありがとね」

だが、商談が盛り上がっているのか、エギルは二人の声に気づいていないようだった。

「お、おい。本当にいいのか？相場の半分以下の価格だぞ？」

「別にいいよ。代わりに回復アイテムをくださいな」

「おお！お得意さんだからな、持てるだけ持ってけ！」

「いや、そんなにはいらぬ」

エギルの巨体に隠れて見えないが、どうもレアアイテムか何かを大量に仕入れたらしい。その上、このぼったくり商店のお得意さんとはどんなもの好きだ、と一同の興味を引いた客。強面のエギルにも平然と相対する口調からして相当な度胸の持ち主だろう。

その正体を見ようとエギルの背から首を伸ばしたアスナは目を丸くした。

「これと、これと……およ？」

「タイム君!？」

カウンターのの上に置かれたポーションや結晶を選んでいたプレイヤーが顔を上げた。

金糸の髪に、深い青の瞳。浅葱色の羽織と黒いマフラーを纏った絶影の異名を持つ客は、エギルの肩口から覗く彼女の名前を呼ぶ。

「アスナさん、二日ぶりだね」

「ど、どうしてここに？」

「どうしてって言われても、ストレージがいっぱいになったから売りに来たんだけど」

「アスナ、こいつのことを知ってるのか？」

既知であるかのように話す二人にエギルが疑問を呈す。

そもそもエギルは常連である目の前のプレイヤーの名前を知らない。タイムと呼ばれたプレイヤーが間違いなくトッププレイヤーであることは、毎度持ち込まれるアイテム群を見て感づいていた。だが、フロアボス攻略戦では見たことがないこと、目立つ姿であるにも関わらず噂すら聞いたことがないことが重なり、その正体までは知らなかったし、知る必要が無いと思っていた。

「知ってるも何も、この子が絶影ですよ！」

「あー、名乗ってなかったっけ。どうも、ヴィクタイムです」

「な……！」

ピースサインを閉じたり開いたりするヴィクティムを見て、彼らは驚きの声を上げる。

和服の装備を纏う目の前の子供が、フロアボス単騎撃破などという偉業を為した幻のプレイヤーだとは思えない。くすみのないブロンドのポニーテールに、人畜無害そうな童顔。

そして何よりキリトは、目の前の子供に見覚えがあった。

「アンタ、27層で会った……」

「んん、誰だっけ？」

「27層で6人パーティを助けてくれたの憶えてないか？フィールドで後ろからカマキリに襲われそうになったところを助けてもらったんだけど……」

「27……無限沸きトラップのおかげでレベリングが捗ったことしか覚えてないな」

その言葉にキリトたちは戦慄する。

第27層でキリトがかつて所属していた月夜の黒猫団というギルドは、ヴィクティムの言う無限湧きトラップに嵌った。宝箱を開くことで発動したそれは、出入り口の無い閉鎖空間且つ、転移結晶無効化エリアでのモンスター無限沸きトラップ。トラップ発動の原因となった宝箱を破壊するか、モンスターがリポップする前に全滅させなければ逃げ切れない、まさに死のトラップであった。

当時、ソロプレイヤーとしてスキルを高めたキリトとは異なり、キリトによるパワーレベリングを敢行していた他のメンバーでは戦い抜くことなどできず、キリトを残して月夜の黒猫団は壊滅した。

なのに、ヴィクティムにとってはそれすらもレベリングの一環だったという。信じられないし、信じたくもない。

「そ、そうか……」

「そうだよ」

齒に衣着せぬ物言いに苦笑しか出なかった。

そんなヴィクティムはエギルから受け取ったポーションや結晶をストレージにしまい込むと、今度はアスナに顔を向ける。

「そんなことよりアスナさん。この前言ってたこと、どうする？」

「あ、その件なんだけどね。教えてもいいかな、つてええ！」
「ほんとう！」

まるで瞬間移動だった。エギルの目の前にいたヴィクティムが、いつの間にかその後ろにいたアスナの手を正面から握っていた。

SAOの中で瞬間移動を可能とするのは、各階層にあるゲートを通じての階層間での移動か、フィールド、圈内問わず使用でき、各階層のゲートに移動できる転移結晶のみ。デスゲームでなければ、死んだ後のリスポーン地点として第一層の黒鉄宮にある蘇生者の間が設定されているが、現在は生命の碑が置かれ、プレイヤーの生死が刻まれている。

そんな常識を覆すかのように目の前で起きた現象に誰もが驚く中、ヴィクティムに手を包まれたアスナだけが反応しなかった。いや、柔らかな手を包まれて赤面するという反応は見せたのだが、ヴィクティムの『はやさ』には驚かなかった。

「今の、見えたか？」

「ギリギリ影を追えたぐらいだ。相当な高レベルで、しかも敏捷に極振りしてなければあり得ないぞ、あんなスピードは」

「だろうナ。ちらつと見えたケド、アイツの籠手と指輪、筋力値を上げるレアアイテムだぜ」

「アインクラッド最速、つてわけか」

レベルアップ時のステータス割り振りを敏捷に極振りし、筋力値はアイテムによるサポートで補っているという二人の見解は正しい。

伝説と囁かれる速度を目の当たりにして驚愕する二人を余所に、アスナとヴィクティムは会話を続ける。会話というよりは、ヴィクティムの一方的な言葉にアスナが撃たれ続けているようではあるが。

「ほんとにアジトの場所を教えてくださいの？ほんとにほんと!？」

「え、ええ」

「やったー！ありがとうございます！」

「い、いえ、気にしないで……」

「それでそれで!?!どこにあるの、ラフコフのアジトは!？」

「そ、その前に!？」

まるで遊園地に来た子供のようにはしゃぐヴィクティムをどうか諫めつつ、会話の主導権を奪うアスナ。その姿は年の離れた姉弟のようにも見えたが、内容が内容だけに微笑ましくない。むしろ、当事者以外の面々は緊張した面持ちだ。

そもそも、ヴィクティムがラフィンコフィンのメンバーでなかったとして、何が目的でアジトの場所など知りたがるのか。近寄らないのであるのならそれでいいが、それ以外の理由が思いつかない。

「約束のフレンド登録を先にしてもらっていい？」

「いいよいいよ。そんなのいくらでもするよ！」

無邪気な笑顔で右手を振り、手早く操作を済ませると、アスナの視界にフレンド登録画面が現れる。あとはOKボタンをタップすればいいだけだが、ヴィクティムの笑顔を見てしまったアスナは、ボタンに触れようとしていた指を停止させた。

何故か、と聞かれれば、それはアスナにもわからなかった。

ただ、ヴィクティムの無邪気な笑みに薄ら寒い何かを感じたのは確か。言葉にできないような不安と、理解できないものを知覚した時に似た恐怖。アスナが感じ、頭で理解できたのはそこまでだった。

そうして口をついたのは、以前からの疑問だった。

「その、これを知ってどうするの？」

「どうって？」

「えっと、ラフコフなんて危険な人たちのアジトを知りたいのはなんでかな、って思って」

アスナの問いにキョトンとしたヴィクティムは、直ぐに笑みを浮かべた。

さつきと同じ、いやそれ以上に冷たい何かを含んだ、乾いた笑み。

「アスナさんは気にしなくていいことだよ。とつても個人的なことだから」

ね。

そう言ってアスナの右手を引く。ヴィクティムからは見えない筈のフレンド登録ボタンを押され、アスナの視界にヴィクティムがフレンド登録されたというメッセージが表示された。

そしてつつかえながらも口を開くアスナからラフコフのアジトの場所を聞き出す。

「あそこだったんだ……うん。それじゃあね！」

ヴィクタイムの視界にもアスナがフレンド登録されたメッセージが表示されると、踵を返した。片手をあげてエギルの商店から出ていくとする。

そんなヴィクタイムを止めたのはキリトだった。

「ちよつと待ってくれないか？」

「……今度はなに」

アスナへの対応とは異なり、明らかに不機嫌な様子。

「い、いや、もしそこに行こうとするなら止めた方がいい。あいつ等は本物の殺人者だ。いくら君が速くても万が一ってことが……」

「うるさいな」

「え」

「うるさいよ、何様なんだよ」

雰囲気が変わった。

「つーか誰だよ。僕が何しようが関係ないでしょ」

「だ、だからって、態々死に行くようなものなんだぞ。この世界はゲームであつても」

「遊びではないって？そんなの現実だつて一緒だろ」

再びキリトの言葉を遮って紡ぐ。

「アンタが誰かなんてどうでもいいし、ラフコフが現実でも殺人者なのかなんてさらにどうでもいい。僕にとってはここが現実で、この世界であいつらが殺人者であるということが全てだ。僕は好きなように生きる。今ここで、誰にも縛られずに生きている。それを誰かに邪魔なんて、させない」

小さい体躯。ステータス上、力でキリトが負ける訳が無い。

それなのに、キリトは気圧された。肩に置かれた手を振り払えず、されるがままに押し退けられて、ヴィクタイムの道を開ける。

ヴィクタイムの歩む道を遮るものは何もない。

商店の扉を開け、ベルが鳴る。

そのあとを追ったアスナが扉を開いたとき、そこには誰もいなかった。

3話 往日

5

天宮遙という少年の話をしよう。

日本人の父と、北歐を出身とする母から生まれた、らしい。というのも彼は、生まれたその日に両親から見放され、憶えている最も古い記憶は、孤児院で年の近い子供らと侘しい食事をしている風景だった。

その中でも遙は歪で、悪い意味で目立っていた。

透き通るようなトウヘッドのブロンドに、翡翠の瞳。母親の血管が色濃く出たせいも、日本人離れした容姿をした遙に近づくのは施設の職員くらいだった。

誰からも煙たがられて、一人寂しく生きて、そのまま死ぬのだと思っていた。

そんな彼に転機が訪れる。

希望も無く、諦めだけを重ねて生きていた幼い彼には、まさしく救済であった。

その日、孤児院にやってきたのは二人の夫婦だった。

三十代前半よりも若い見た目の二人は、誰に目をくれることも無く、施設の職員の案内の元、遙の前に来て言い放つ。

「僕たちと家族にならないか？」

誰にも必要とされない。誰からも相手にされない。誰よりも不幸であるはずだと思っていた少年は、その日、誰よりも幸福な少年になった。

家族に虐待を受けた子供がいた。家族を失った子供がいた。家族を知らない子供がいた。自分が世界で一番不幸だと嘆く子供がいた。狭い世界に垂らされた蜘蛛の糸を、小さな子供が掴まない筈がない。

それなりの葛藤はあった。それ以上の嬉しさがあった。

かくして遙は養子として件の夫婦に引き取られることになった。

子供一人を引き取るだけあって、夫婦の暮らしは豊かなものだった。

た。高層マンションに住む二人は、一つの部屋を遥に与え、温かい食事と柔らかい衣服、ふかふかのベッドと、惜し気もなく遥の生活が豊かになるようなモノばかりを与える。今までの生活を忘れられない遥は最初こそ戸惑っていたものの、目に見える二人の愛情を少しずつ受け取っていった。

中でも夫婦が遥に与えていたものの中で力を入れていたのが教育だ。勉強もそうだが、何より人の為に在れと、人としての在り方について説いていた。

義父は政治家で、人の為に働いている。遥を養子に迎え入れられたのも、人を助けたいと思っっているからだ、と。

疑うことも無く夫婦の言う通り、人を助け、健やかに成長していった遥に、二度目の転機が訪れる。

ある日、義理の両親に連れられて行ったのは、県内にある横浜港北総合病院。その個室病棟だった。

六畳はあるその病室には一人の子供が眠っていて、その男子が自分の兄にあたる人物だと伝えられた。その驚きたるや、孤児院に夫婦が来た時以来の衝撃だったと遥は思う。

ベッドに眠る義兄は生まれつき腎臓が弱く、移植手術を受けなければ大人になる前に寿命を迎えるところだった。親族では腎移植のドナーになれる人物はいなかったが、幸か不幸か、遥はドナーとしての条件を備えていた。

命が助かるなら。

遥は一瞬の迷いも無く、自身の臓器を差し出すことを決めた。自分を絶望から救ってくれた両親の実子を助けたいと、心から思っていた。

そして行われた生体腎移植。子供にとっては死刑宣告にも等しい余命のカウントをされていた義兄は無事、その命を取り留めた。

無事で良かった。誰もが喜んでいて。自分を救ってくれた人の大切な人を助けることができた。

遥の内心は達成感と安堵で満ち溢れていた。それから義兄は徐々に回復し、遂には長年を過ごした病床から生家へと戻るに至った。家

族4人で暮らせることに夢を馳せていた遙は、しかし一人病院に残ることになる。

それは遙の片親が北欧の出身であるという証明。精密検査により発覚した、遙の特殊性。

天宮遙というハーフの少年は、北欧の白人の中でも極一部にみられるエリート・コントローラーであった。

HIVに抗体を持つ稀有な体質であり、今後のAIDS治療の中でも注目を受けている遺伝子を持つ者。

惜しむらくは、数少ないAIDS完治の前例で行われた骨髄移植のドナーになるための年齢に達していないこと。

だが、彼は奇跡を起こした。

同病院の患者と、白血球の型であるHLA型が完全に一致したのだ。しかも、患者は双子で、計三人のHLA型が一致するという、奇跡と呼んでもまだ足りない奇跡。

そして、世界的にも例を見ない、未成年間の骨髄移植が決定された。それでAIDSが完治するかは前例が極端に少ない故に不透明。けれど、患者とドナーは一縷の望みに賭けることにした。

移植手術は遙と患者の健康を害さないよう慎重に行われ、患者の快方という大成功を収めた。

治療に携わった医師と患者の主治医、遙の意志を尊重して今回の治療計画を推し進めた義父の名は日本中に知れ渡った。三人の子供に対する募金額は何億円にも達し、遙とその家族は誰から見ても裕福で幸せな生活を送る筈だった。

しかし。

身を削ってでも誰かを助ける自己犠牲。義理の両親から教わった、人の為に在れという高潔な精神。

それが、遙を体よく利用する為の洗脳だったのだと、少年は知ることになる。

1年にも及ぶ入院生活を終えた遙は、両親と共に電車で帰宅することになった。平日の昼前のホームには人が少なく、ようやく家に帰れると胸を躍らせていた遙はホームの淵で電車を待っていた。

遠くから聞こえる電車の揺れる音。ブレーキをかける甲高い音がホームに入ってきた時、遙の体は宙に浮いていた。

背中に受けた小さな圧迫感を不思議に思うより早く、遙の小さな体は線路へと落下していく。1秒にも満たない僅かな時間。不安定な体勢を立て直し、着地するには細いレールの上に器用に着地した。両親の願いに応える為に鍛えた運動神経が役に立った結果ではあったが、この場では誰にとっても不幸な結末を迎えることになる。

命が助かった遙にとっても、遙を殺そうとした両親にとっても。

迫りくる電車に体を硬直させたが、それも一瞬。どうにか回避しようとして線路の上から飛び退いたが、僅かに遅かった。

結果だけを言えば、遙の命は助かった。血液を大量に失い、幼いながらに三度目の大手術を行うことになったが、それでも生きていた。腎臓を義兄に分け与え、稀な体質故に骨髓を見知らぬ患者二人に移植することで命を救う。体力と精神力が揃っていなければ成し得なかった事実。そういう観点から言えば、遙の命を救ったのは、遙に人の為に在れと説いてきた両親とも言える。

ただ、遙を殺そうとしたのも、他ならぬ夫婦だった。

そもそも、二人が遙を引き取ったのは、天宮遙という子供の価値に目を付けたからだ。家族を知らず、誰にも必要とされていない。健康状態は優良で、幼児にしては知能も高かった。里子として引き取る前に検査を受けさせれば、実子のドナーに成り得る上に、世界的に見ても稀なエリート・コントローラー。

この時点で、夫婦は遙を利用し尽くす計画を立てた。

ただ、何も二人は生まれた時から狡猾な悪人だったわけではない。それこそ、普通に幼少期を過ごし、それぞれが将来に夢を馳せ、夫は夢を叶えて、妻は出会った夫を支えたいと思った。二人は愛し合い、その間に生まれた子供は誰よりも幸せだった。

彼らの唯一にして最大の不幸は、ただ一人の子供が生まれつき病を抱えていたことだろう。

5歳になる前に余命宣告をされ、親戚は憐みをもって接してくる。医師にはドナーが見つからなければ助からない、終末期医療を行って

いる同年代の患者とコミュニケーションを取ってみてはと、諦めの言葉だけを聞かされてきた。

彼らの頭の中には、自分たちの愛すべき子供を助けるといふ目的以外が消えていた。誰を犠牲にしても、息子を助けなければという強迫観念にも似たそれは、二人を狂気に走らせる。

息子のドナーを探し、今までの苦痛を帳消しにできるだけの幸せを与える。そのためには金と名誉、誰もが羨み、何をしても自分たち家族が正義であらねばならない。

その結果が、天宮遥という孤児の利用。実の子供の命を救い、世界でも稀なAIDS克服の立役者となり、そして悲劇の死を迎える。

というのが夫婦の計画したストーリーだった。

しかし遥は生き延びる。

夫婦の最後の計画では、遥を事故に見せかけて殺し、日本中で話題の英雄的少年が身を削りすぎたが故に精神を病み、自殺する、という筋道だった。

そんな計画があつたとも知らず、遥は奇跡の生還を果たす。

ホーム下に回避した遥だったが、避けきる前に電車はホームへと進入していた。遥に気づいた車掌が急ブレーキをかけるが既に遅く、僅かに動きを止めた車輪とレールの間に、遥の右足が巻き込まれた。

押し潰され、引き摺られ、押し折られて、体の一部が切り離されていく感覚。死ぬよりも辛い痛みに気絶と覚醒を繰り返し、死んだ方がマシだと思いつながら救助を待った。

そんな遥の元に救助が来たのは、失血量が全血量の三分の一になった頃だった。ホーム下に逃げてしまったことで、遥を再度、轢かないよう慎重に電車を動かさなければいけなかった為だ。

救急搬送された遥の治療を担当した医師は、右足の強引な切断と大量出血によるショック死、若しくは失血死にならなかつたのは奇跡だと言う。痛みには耐えきつた遥の精神力を褒め称え、その上で残酷な現実を突きつけなければいけないことで、罪悪感に苛まれていた。

腎臓の生体肝移植。骨髄の提供。そして、右足の切断。

切断、というには語弊があるか。電車が退いて、救急隊員が駆け付

けた時、遥の右足は文字通り皮一枚で繋がっている状態だった。

こんな不幸があつていいのか。臓器移植、骨髄移植の際に手術を担当した医師や看護師たちは嘆き、遥の存在によって生かされた患者の主治医は、遥の現状を患者に伝えるべきか悩んでいた。本来は知ってはならない互いの情報だが、遥と同様に他人を心から思いやれる彼女達ならば、何か言葉を掛けられるんじゃないかと思つたのだ。

だが、三日の昏睡状態から目を覚まし、医師から自分の状態を聞いた遥が絶望したのは、そこに両親の姿が無いからだつた。

右足切断の痛みを覚えていた。生涯忘れることはないだろう。だが、それ以上に背中に受けた小さな衝撃を、遥は忘れられないのだ。

それからも来ることのない両親を待ち続けた遥は悟る。

自分は、あの夫婦に利用されたのだと。

ニュースを見れば、英雄的少年の悲劇を連日のように報道されている。支援金と銘打たれたそれは、病院に直接届くものと、家族に届くものがあつて、片一方はそのまま消えていた。

悲劇の家族。取り上げられる家族の姿を見つめる遥の目は、絶望よりも暗い色をしている。

「やあ、遥君。久しぶり」

そんな彼のもとにやつて来たのは、遥の担当医ではない。

骨髄移植をした際に親交を深めた、レシピエントの主治医。倉橋と名乗った医師は、その腕にヘルメットのようなものを抱えていた。

「これ、憶えているかな？」

前回の入院の際、倉橋が当選したナーヴギアを借りた遥。特に何をすることもなく、VR世界を歩き回っただけだったが、その技術力の高さには感動したものだ。

その時の遥の様子を見ていた倉橋は、リハビリもまだできない遥を案じて持ってきたのだ。

世界初のVRMMORPG。ナーヴギアで稼働する、その日正式サービスの始まった『ソードアート・オンライン』を。

4話 悲願

6

絶影と呼ばれるには遅すぎる速度で洞窟を駆け抜ける。

アスナを先頭に、キリトと遅れて途中で出会った攻略組ギルドの風林火山が続く。誰もが必至の形相で、そこに含む感情は心配と不安が占めていた。

「アスナ、ヴィクティムがラフコフのアジトに着いてどれくらいだ？」
「もう5分は経ってる」

「オイオイ。そんなだけの時間がありや、プレイヤー一人なんてとつくに殺されちまうぞ!？」

「いえ、彼が相手ならその心配は無いはずです。むしろ、心配すべきは……」

エギルの店からヴィクティムが去ってすぐ。嫌な予感がしたと言うキリトの言葉で、フレンド追跡機能を確認したアスナは顔を青ざめた。

高速で移動するプレイヤーアイコンは、アスナが伝えたラフィン・コフィンのアジトのある洞窟へと真っ直ぐに進んでいた。キリトの心配は的中していたという訳だ。

それからすぐに、ヴィクティムを追いかけるキリトとアスナ、ラフコフ討伐作戦を提案した聖竜連合に情報を伝えるアルゴに分かれてエギルの商店を出た。その道中でクライン率いる風林火山と遭遇し、今に至る。

ラフコフの危険性を知っている彼らは、一様にヴィクティムの心配ばかりだ。攻略組に匹敵する実力を持っているとはいえ、たった一人では肉食獣の群れに囲まれるようなもの。間違いない殺されてしまう。

しかし、ただ一人、ヴィクティムの実力を身をもって知っているアスナだけが首を横に振る。

速さとは、攻撃力であり、防御力。

凄まじい性能を持つ魔剣でなくとも。鉄壁の防具でなくとも。

ヴィクティムの持つ速さは、それらに匹敵する武器であり、防具だ。ヒースクリフの持つ神聖剣のような、この世界で唯一のユニークスキルと言われても納得できる。

故に心配すべきは、ヴィクティムの無事ではなく、ヴィクティムが犯罪に手を染めていないかということ。

より具体的に言うならば、彼が人を殺していないかということだった。

「ティム君……！」

そして追いついた先で、彼女たちは地獄を見ることになる。その8分前。

「やあ、Poh。久しぶりだね」

最速の名に恥じない速度でラフィン・コフィンのアジトに辿り着いたヴィクティムは、友人に声をかけるような気安さでギルドリーダーに声をかけた。

攻略組を率いるヒースクリフやアスナとは似て非なるカリスマを持ち、たった一度の邂逅でヴィクティムに目を付けられた、SAO最悪のプレイヤー。

「……Wow、珍客が来やがったな」

「随分な言い草だね。せっかく来てあげたのに」

「ハハ、こっちは待ってねえんだがな。近いうちにPartyがあるもんでよ」

「安心しなよ。そのパーティーは開催されないから」

ラフコフのアジトがある洞窟は、浮遊し、ランダムに移動する地面を進む仕様になっている。そのうちの一つに集まって、自分たちの戦果を自慢し合うギルドメンバーを見渡すように岩の上に座るPoh。ヴィクティムはさらにその上に浮遊する地面の淵に立って、彼らを見下ろしていた。

「そうかい。それで、何をしに来やがった？」

「当然、殺し合いをしに」

腰に差した鞘から、片刃の短剣を逆手で引き抜く。

それを威嚇と判断したのか、下卑た囁いで談笑していたラフコフの

メンバーも、各々の武器を手に立ち上がった。P o hの両隣に構えていた幹部の二人も、ヴィクティムを睨んでいる。

その様子に、しかしヴィクティムは笑みを浮かべた。

「そっちは全員、ヤル気つてことでもいいかな？」

「そうみてえだな」

「リーダーの癖に指示は出さないんだ」

「俺あ放任主義でな。だがまあ、お前が相手じゃ、全員で殺らねえと全滅しちまうし」

な。

P o hが言い切る前に、ラフコフの視界からヴィクティムが消える。浅葱色の羽織が尾を引くことも無く、上に浮いていた地面から移動したのだ。

問題は移動先。

移動のモーションすら見えなかったせいで、何処に行ったのか予想もつかない。人を殺すことだけに執着してきた彼らには、対人戦での予測など立てようもないのだ。

「それじゃ始めよう。殺したいアンタ達と、死にたいVictimの殺し合いをさ」

短剣を振るい、勢いそのままに回転して瞬間二連撃を叩きこむ。

消えたように見えたヴィクティムはラフコフメンバーの中心に着地していた。そして、鍛え上げた速度でもって、殺戮を開始する。

一瞬にして一人を殺したヴィクティムは、踊るように敵の中心で刃を振るう。

彼が脅威足りうるのは、もちろん『はやさ』故だが、はやさにも種類がある。純粹な最高速度。最高速度に達する加速力。動き始めの初速に、反応してから動く瞬発力。その全てのはやさの頂点に立つのがヴィクティムというプレイヤーで、その中でも最高速度と瞬発力においては他の追従を一切許さない。特に瞬発力は、反応速度こそ並みのプレイヤーと同等だが、その後の速さが常軌を逸している。

エギルの店で見せた瞬間移動と錯覚する速さ然り、今のラフコフとの殺し合いの中で見せる速さ然り。

後の先を取ることにおいては、防御の後に攻撃をする戦闘スタイルのヒースクリフと対等以上に渡り合えるほどだ。

「お、おい、こいつ……！」

「間違いねえ！絶影だ！」

対人戦では絶対に相手にしたくない彼を前に、ラフコフのメンバー達は憤慨して攻撃をより苛烈なものにしていく。

これまで、ヴィクティムは数人のレッドプレイヤーを殺してきた。中にはラフコフのメンバーもいたのだろう。神出鬼没のレッドプレイヤー狩りを恐れて自由に動けなかった彼らは、その鬱憤を晴らし、脅威を排除するためにヴィクティムを殺そうと躍起になっていた。

だが、四方八方から襲い掛かる斬撃、刺突を踊るように回避し、神速の連撃をお返しとばかりに叩きこむ。戦闘が始まり、2分が経った時点で、既に7人のプレイヤーがこの世界及び現実世界から退去していた。

「おいおい、まーた速くなったのか？」

「アンタが会いに来てくれないからさ。モンスターの群れも、フロアボスも、僕を殺してくれないどころか、強くしてくれるばかりだったんだよ」

「そりゃあ悪かったな。だが、このままじゃお前を殺せねえ」

Pohの言葉を合図にして、ヴィクティムの左右から投げナイフとエストツクの高速突きが襲い掛かる。

「ジヨニー、ザザ。君たちは強くなったのかな？」

「うっせえな。ヘッドに言われなきや、お前なんかあの時殺してたつーの」

「そうだ。貴様なんて、いつでも、殺せる」

「そっか」

二人の幹部の攻撃を後方に回避したヴィクティムは、さらにその後ろから迫るプレイヤーの首を見ることも無く切断し、笑みを浮かべて突撃する。

「じゃあ、遠慮なく」

殺人ギルドと、死にたがりの殺人者による地獄絵図。

ジョニー・ブラックの毒ナイフは掠ることも無く、牽制にしかならず。Pohの次に高い戦闘力を誇るザザの刺突も、遊ばれるように回避、迎撃され、その間にも駆け回るヴィクティムは隙を見せた敵を惨殺していく。

血を啜る獣だったはずのラフィン・コフィン、ここにきてようやく悟る。

本物の獣は。死を齎す凶悪な肉食獣は。

今はヴィクティムの役割なのだ。

「う、うわあああああ！」

そして一人のプレイヤーが死の恐怖に耐えきれず、敵前逃亡を図る。普段は殺す側だった、奪う側だった自分が、全く逆の立場に置かれ、醜く、情けない姿を晒しながら逃げていく。

その様子を一瞬だけ視界に収めたヴィクティムは、何を言うでもなく、思うでもなく、殺戮の手を緩めることなく殺し合いを続ける。

「相変わらずの、化物め」

「お互い様でしょ。それに、おたくのリーダーの方がよっぽど化物だと思うけど」

そんな逃亡を許さないプレイヤーが一人。

味方であるはずのギルドメンバーを躊躇いなく殺すと、重い腰を上げて立ち上がった。

「さて。そろそろ俺も参加しようか、と思ったんだがなあ」

「いいから早く来なよ。アンタの好きな楽しいパーティーだろう？」

「勿論大好きだぜ。だが、こうなると戦いじゃなく殲滅になっちゃうからな。俺あ、人が苦しんでねえと楽しめねえ」

「何を言ってる……」

Pohの言葉の真意を汲み取れないヴィクティムの耳に、新しい音が入る。革のブーツやヒールで走る音。鎧が動くときに鳴らす金属音。そして、以前にも耳にした荒れた呼吸の音。

自身の装備や、ボロ衣装装備ばかりのラフコフメンバーからは絶対に聞こえない音を響かせて、彼女たちは地獄にやってきた。

「ティム君！」

幹部二人と睨み合いつつも、ラフコフのリーダーに敵意を向ける
ヴィクティム。浅葱色の羽織には数本の赤いラインが入っていて、ダ
メージエフェクトが僅かに出ているがHPはイエローゲージにも
なっていないだろう。

ヴィクティムの無事を確認して胸を撫で下ろす風林火山と討伐隊
の面々だったが、アスナとキリトだけは違った。

彼が無事であることには安堵したが、それに気づいた途端、顔を青
ざめた。

情報では、ラフコフのメンバーは40人を超えていたはず。しか
し、目の前にいるのはどう見ても20人程度だ。

「チツ。邪魔な奴らが来やがった」

「潮時だな。お前とはこれっきりにしたいぜ、ヴィクティム」

「……は？」

踵を返したPohを、表情が抜け落ちたような顔で見つめる。

ぶらりと腕を下ろした瞬間を好機と見るや、幹部二人が最速の攻撃
を仕掛けた。ジョニーの毒ナイフが3本、ライトエフェクトを纏って
投擲され、ザザの5連撃ソードスキルが開始される。

狙いは必中。軽装のヴィクティムなら、食らえば即死。ジョニーの
毒ナイフによって麻痺しても、ザザの5連撃を食らっても、必死は免
れない。

「死、」

「ねええー！」

「やめてえー！」

攻撃よりも早い二人の咆哮と、アスナの絶叫が響いて。

瞬間、ギン、と。

二人の後方。アスナたち討伐隊とは真逆の位置で、壮絶な衝撃を
伴って金属がぶつかる音が響いた。

「どこに行く気だよ、Poh」

「HA！真正銘の化物か、貴様」

「そうかもね。迷宮に迷い込んだ勇者どもを殺す化物。その化物を殺

した英雄にしてやるって言ってるだろ?」

「っ、そりゃあ心惹かれるが、英雄の役割は俺じゃねえ」

「いいや。僕を殺せるのはアンタだけだよ。だから、ほら。殺し合いを続けよう?」

前腕ほどの巨大な刃を持つ中華包丁のような短剣『友切包丁』と称された魔剣を振るい、天井を蹴って神速で落下してきたヴィクティムを吹き飛ばす。誰にも見えなかったが、幹部二人の攻撃を跳んで避けたヴィクティムは、天井に見える浮遊する地面の裏に着地していたらしい。

そして始まったのは、フロアボスを単騎撃破した際の、ヴィクティムのステータスを完璧に、十全に引き出した攻撃方法。

地面を、壁を、天井を蹴り、フェイントを織り交ぜつつヒットアンドアウェイを繰り返す、反撃不可能、攻略不可能の速度の檻。

辛うじてPohが生きていられるのは、天性の勘の良さと、人を殺してきた経験から導き出される狙いの予測を立て、ギリギリでヴィクティムの一撃一撃を防いでいるからだだった。

攻略組であつても手を出せない戦いが始まった背後では、また別の戦いが始まっていた。

アルゴが伝達した情報によって後から到着した聖竜連合を中心に、本来の予定を前倒ししたラフィン・コフィン討伐戦が開戦されたのだ。

と言つても、ヴィクティムとの戦闘で大多数が戦意を喪失しており、残っているのは数人のメンバーと幹部二人だけだった。

「シュミットさん、私はティム君の加勢に向かいます」

「絶影の?」

聖竜連合のデイフェンダー隊リーダーにして、今回の討伐戦でも指揮を執るシュミットは疑問を呈す。

「貴女の実力は知っているが、絶影の速度についていけるのか?むしろ邪魔になるのでは……」

「っ、大丈夫です!」

シュミットの言葉はもつともで、攻略組随一の速度を、ヴィクティ

ムと出会ってさらに強化してきたアスナであっても、彼らの戦闘には入れないだろう。

だから、アスナの言葉は単なる強がりだ。

二人の戦いは壮絶で、割り込める隙など無い。紛れもない、純粹な殺意をぶつけ合う殺し合い。モンスターしか殺したことのないアスナたちが、人を殺す覚悟も無いままに割り込めばどうなるかなど想像に難くない。

それでもアスナは、ヴィクティムの元に行きたかった。

弟のようだから、ではなく。好意を持っているから、ではなく。

これ以上、彼から何かを奪うことなく、彼に何かを奪わせたくないから。

思い出したのは、本当に偶然だった。

アスナの父がCEOを務める総合電子機器メーカー、レクトの医療機器部門が協賛した手術の、英雄的少年の姿。義兄の腎臓移植のドナーになり、奇跡の適合者として幼いながらに骨髄移植のドナーとなった、天宮遥という少年を。

名前を思い出したのは、ヴィクティムと何度目かの遭遇を果たした時だった。

いつものようにフレンド登録の申請と攻略組への加入を申し込み、いつものように断られていた時のこと。ヴィクティムに追いつくため、レベリングとレアドロップアイテムの探索による敏捷値強化を敢行していたアスナが、一時的とはいえ彼に比肩する速度を得た時。

驚きと共に浮かべた微笑みを見て、アスナは思い出した。

速くなったね、と笑う彼を見たことがある。

アスナの父、結城彰三がまるで自分のことのように嬉しき一杯の笑みで食卓に出した数枚の写真。金髪緑眼の少年が、病室と思しき白い部屋で自分の父と写る写真や、満面の笑みでピースをしている写真。どれもこれもが嬉しそうな表情で、入院している少年とは思えなかった。

彰三は自慢げに少年、遥の話をした。

ニュースで話題の、心優しき英雄のような少年だと。自分の臓器を

提供する手術で、失敗する確率が低いと言ってもゼロじゃないのに、それでも笑顔でいられる高潔な精神。元々は孤児だったらしいが、それを感じさせない快活さ。

そして、兄のナーヴギアを被る数日前に聞いた、右足切断の悲報。結城明日奈にとって、天宮遙という少年はテレビの向こう側の存在だった。父の話の聞いても、悲報を聞いても、あくまで他人事。大変だな、可哀想だなと思ってても、その程度の存在だった。

けれど、それを思い出してしまったアスナにとって、ヴィクティムという少年を放っておけなかった。

ヴィクティム。

犠牲者を示すその名前は、きっと彼の本音ではないか。

帰りたくないと言ったのは、この世界には無く、戻ってしまったえば直面しなければならぬ右足切断という事実を受け入れたくないからではないか。

現実世界のニュースでは、彼の名前こそ知れ渡っているものの、その顔を知る者は限りなく少ない。それは両親の思惑故のものだが、建前としては彼の将来が自由であってほしいからである。

ならば、この世界で唯一彼を知るアスナが、彼を守らなければならぬ。

自分より幼く、身を削って命を救い、事故で足を奪われ、この世界に自由を奪われた少年が、世界は残酷であると同時に優しいのだと知ってほしい。この世界に囚われ、だからこそ多くの人との出会いで変わった自分のように。

それが彼の本意ではないとしても、生きていなければ何もできない。

アスナは、ヴィクティムに生きてほしいのだ。

強いと思った。優しいと思った。可愛いと思った。守りたいと思った。

それらの感情を一つずつ感じて、アスナは思う。

また会いたい。現実世界で、天宮遙に会いたい。自分のことなど知らず、絶望故にこの世界に居続けたいと願った少年を、褒めてあげた

い。優しくしたい。彼が誰かに与えた幸せを、彼に救ってもらった命で、返してあげたい。

「いいんじゃないか？アスナなら、あいつに追いつける。俺も一緒に行ってPohを叩けば、ラフコフを根っこから潰せる」

「だが、幹部はどうする。絶影がPohを抑えているうちに、全戦力であいつらを拘束したほうがいいはずだ」

「大丈夫さ。幹部二人は風林火山と討伐隊に任せればいい。残りをアタたちが掃討し次第、あいつらの加勢に行ってやればいい」

「む、むう。そうだな。絶影に加えて、黒の剣士と閃光がいれば、あのPohを確実に仕留められる。わかった。そちらは任せたぞ」

「ああ」

シユミットの肩に手を置いてアスナの後押しをしたのは、先ほどまで幹部二人を一挙に相手していたキリトだ。

「キリト君……」

「俺にとつて、あいつはただの他人だ。だけど、アスナにとつてはそうじゃないんだろ？」

決意の表情で頷く。

恩人であり、弟のような存在であり、生きていて欲しい人。

助かるなら何でもいいけれど、誰よりも彼を知る自分が助けたい。

「うん。ティム君は私のことなんて知らないけど、私は彼のことを知ってるから」

だから、助ける。

実力不足は百も承知。

他人の助けを受け入れてくれるかなんてわからない。

それでも、ヴェイクティムを心から思っただけ動く人間がいることを知っているということが重要なのだ。

「行くうー！」

「どうしたんだよ、Poh。殺人こそが君のアイデンティティじゃないかったの？」

「そりゃあ勘違いだな。俺あ楽しみたいだけさ、このゲームを。PK

も、このギルドも、その為の道具でしかねえさ」

「ふうん。ま、どうでもいいけどさ。でも僕のことには殺してもらおうよ？人を殺すのに、君ほどの適任はいないんだから」

「化物狩りは俺の領分じゃねえ」

「ティム君！」

速度の檻を停止して、インファイトで短剣をぶつけ合うヴィクティムとPoh。

そこに割って入ったのは、紅白の装備を身につけ、腰に水晶のような細剣を差したアスナだ。剣を抜かず、無防備で目の前に現れたアスナに、ヴィクティムの瞳が一瞬だけ揺れる。

だがすぐに邪魔者へと認識を変え、踏み込む先がPohに読まれ無いため障害物として完全に隠れた。そして隠蔽スキルを発動し、視線を外さなかったアスナ以外の視界から完全に姿を消す。踏み込む先は右手前方。Pohの左後方に現れる。右手に持った短剣を振り抜けば、ソードスキルなど無くても即死の間合い。

そんなヴィクティムの動きを止めたのは、またしてもアスナだった。

「待って！」

脇を抜けるヴィクティムを後ろから羽交い絞めにして、アインクラッド最速のスピードを生み出す足が地に着かないように抱き上げる。

そんな戦場にあり得ない隙をPohが見逃すはずもない。

暗く輝いた友切包丁が、二人の首をまとめて切り離さんと振るう。

「な、離せ！どけ！」

「落ち着いて！あいつの相手はキリト君がしてくれるから！」

「Ha。まるで獣だな」

「そう言うアンタこそ。仲間はまだ終わりだっていうのに、一人で逃げようとするなよ」

必殺の一撃を防いだのは、友切包丁と同じ黒い、しかし異なる威圧感を持つ直剣だった。50層のラストアタックボーナスとしてドロップし、要求値を満たして以来、頼れる相棒としてその剣振るって

きたキリトはP o hを弾き飛ばし、アスナとヴィクティムの前に立つ。

できればアスナが説得し、3人で攻めることができればよかったが、口調が荒くなっているヴィクティムの様子を見るに、それは難しいだろう。

「黒の剣士が相手となっちやあ勝ち目はねえな。ここは撤退させてもらうぜ」

「仲間を見捨てるのか？」

「それをお前らが言うかね。今まで何人の攻略組の仲間を見殺しにしてきたんだ？」

「それは……ッ」

「ま、んなことあどうでもいい。そいつのせいでつまんねえことになっちまったし、別の機会を用意してやるよ」

「……まだ逃げられると思ってるのか？」

「ああ。じゃあな、黒の剣士。また会おうぜ」

そう言うと、彼らが立つ地面の淵に立って、背中から落下した。

目の前の出来事を処理するのに数秒を擁したキリトは、ハツとして地面の淵まで駆け寄る。そこには浮遊する地面が流れており、P o hの姿は既になかった。

おそらく、ヴィクティムと同じように隠蔽スキルを発動しながら高速移動をしたのだろう。そうやってしまえば、キリトの索敵スキルであつても追うのは困難だ。

だが、いくらレッドギルドのリーダーとはいえ、一人では計画殺人はできないはず。その上、残りのラフコフメンバーは既に確保済みだ。ヴィクティムに殺されたメンバーが生きていれば手こずつただろうが、そういう意味では、今回の作戦の一番の功労者はヴィクティムであると言える。

しかし、それは攻略組の結果論だ。

アスナだけが知る真実を知らない彼らにとっては、ヴィクティムはレッドプレイヤーではないモノの、頭の可笑的いプレイヤーで、それがたまたまラフィン・コフィンとの殺し合いに発展したとしか思つて

いないだろう。

そして、そのアスナでさえも、ヴィクティムの目的を知らない。

「逃げるな！クソ、離せ！」

「ちよっ、落ち着いてティム君！」

「待て、待ってよ！」

腕を振り、足を動かし、けれど鍛え上げた速度を發揮できないヴィクティムの叫びが響く。

後方の戦闘は終了し、急遽始まったラフィン・コフィン討伐戦は、リーダーのP o h以外を黒鉄宮送りにすることができた。

だが、その戦闘開始の合図となったヴィクティムの悲願だけが、叶うことは無かった。

「P o h——ッ！」

5話 失考

7

「アスナ、ラフコフの収監と討伐隊の撤退が終わったよ」

「そう、ありがとう」

「……そっちは？」

キリトが心配そうに目を向けたのは、未だにアスナの腕の中で項垂れているヴィクティムだ。

ステータスを敏捷に極振りして、筋力値はアイテム頼りのヴィクティムでは、同じ速度特化でも適度に筋力値を上げているアスナの拘束から抜け出せないのだ。もともと、本人にその気があるのかは怪しいものだが。

ぴくりとも動かないヴィクティム。まるで死んでいるかのような彼は、静かに口を開く。

「……なんで」

「え？」

「なんで邪魔するんだよ……」

僕はただ、殺されたかっただけなのに。

そう紡いだヴィクティムに誰もが眉を顰める中、アスナだけがやはり、と表情を変えなかつた。

殺されたい人間なんていない。ましてや、このデスゲームの中で生き残っている、家族や友人、恋人と長い間離れ離れになっているプレイヤーたちは皆、現実世界に帰る日を待ち遠しくしている。何より、死にたいと思ってしまったプレイヤーは自死を選ぶことが多い。浮遊城の外に身を投げ、圏外で痛みも無く自らの体に剣を刺す。

だから、相手がプレイヤーであれモンスターであれ、誰かに殺されたいと思つてプレイする人間はいないと言つていい。

そんな常識の外にいるヴィクティムは、誰からも理解されない筈だった。

少なくとも、現実世界ですべての事情を知る医師たち以外には。

「キリト君、クラインさんたちも。少し、二人きりにしてくれませんか

？」

「……わかった」

「いいのか、キリト？」

「ああ。アスナが言うなら大丈夫だろ」

攻略組として。第一層から付き合いのあるプレイヤーとして、キリトはアスナの実力を信頼している。それは同じ攻略組のクライン達も同じだろう。攻略の鬼として、これまで攻略組を引っ張ってきた彼女の実力ならば心配は無い。と思う反面、彼らの脳内には先ほどの戦闘が思い返されていた。

笑いながら最悪のレッドプレイヤーと切り結ぶヴィクティム。

その姿は、彼らが剣を交えた狂ったプレイヤー達よりも狂っていた。

しかし、目の前にいるプレイヤーには先ほどまでの威勢はなく、アスナが抱えていなければ幽霊と間違えそうな程に生気が無い。

不安を抱えながらもアスナを安全エリアに残し、洞窟の入口へ戻っていく。最後尾にいたキリトの影が見えなくなつてから、アスナは口を開いた。

「ティム君。私は君に伝えないといけないことがあるの」

「……」

無反応を貫くヴィクティムに、アスナは言葉を選ぶ。

何から言おうか、何を言うべきか。一番伝えたい言葉はなんだ。

数秒の逡巡が辺りに沈黙を齎して、アスナはその言葉を選んだ。すべてを伝えるための最初の言葉として、これ以上に相応しい言葉は無い。

「天宮遥君」

バツ、と結んだ金糸の束で半円を描きながら振り返つた。大きな翡翠の瞳でアスナを見つめ、半開きになった口からは呼気が漏れるばかり。唇の形を変えても、音は出ない。

その様子を見て、もう逃げられないと思つたアスナは腕を離し、ヴィクティムと正面から向き合う。

「私は君のことを知っています。君の、現実世界のことを。君の身に

起こった不幸を、知っています」

天宮遙という少年の献身を、私は知っている。孤児として里親に引き取られ、その恩返しに里親の実子に自らの臓器を分け与えたこと。その体の特異性によって、余命宣告を受けていた双子の姉妹を救ったことを、私は知っている。

天宮遙という少年の不幸を、私は知っている。双子の姉妹を救い、退院したその日に駅のホームから落下し、電車に轢かれたこと。奇跡的に一命を取り留めたものの、右足を切断したこと。小さな体で歩むには、余りにも過酷な人生だったことを、私は知っている。

「だからティム君、遙君が、その、死にたい理由も、何となくだけど想像できる」

その名に込められた意味を想像してからというもの、アスナはその名前を口にすることを避けてきた。想像した理由が、本当に合っているのかどうかは分からない。けれど、自分の運命を呪うようなプレイヤーネームを、他人であるアスナが口にすれば、希望も無くなってしまふと思つたのだ。

「私には、君のように本当の不幸に遭つた経験が無い。辛いことはあつたけど、君に比べれば些細なことだった。でも、それは私の心に重く押し掛かつてたんだ」

裕福な家庭に生まれ育ち、何不自由なく育つてきた。そんな中でも、母からの重圧や、周囲からの期待に応えるための努力は、アスナの心を枯らすには十分過ぎる程だった。

「そんな時にこの世界に囚われて、自由を、時間を奪われたと思つた。でもね、この世界で出会った人たちが教えてくれたんだ。この世界は全部が作りものだけど、それだけじゃない。君が言っていたように、この世界も現実で、出会った人たちとの絆は掛け替えのないものだって」

今までの努力が無駄になる。早く現実に戻って、周りから遅れた分を取り戻さなくては。

第一層のボスが攻略されるまでの一か月間、アスナは絶望と焦燥で荒れるばかりだった。この偽りの世界に負けるものかと、敵対心と諦

観にも似た決意だけを心の支えにしていたのだ。

けれど、その冷めきつた心を、彼らは溶かしてくれた。

それは強さを信頼してくれるキリトやヒースクリフであったり。

職人クラスとして、友人として、気の置けない仲間であるリズベツトやエギルであったり。

現実世界でも会おうと約束した友人である、風林火山や血盟騎士団の仲間だったり。

「それが全てとは言わない。言わないし、言えない。この世界にいる人の数だけ、現実に対する想いがあるから」

この世界で結んだ絆は本物だ。MMORPGをプレイしている者達の間では往々にしてオフ会が開かれるが、それは絆が結ばれた分かなりやすい証明でもある。プレイヤー同士が世界のどこかで画面越しに出会い、自分の分身を操作して、誰かの分身と冒険をし、共に喜び、悲しみ、絆を育んでいく。仮面を被っていたとしても、偽りの自分を演じていたとしても、それを操る自分の心は偽れない。だからこそ、誰かとの意思疎通に際して、どこかに本当の自分が混じる。

そして、ソードアート・オンラインでは、ゲームマスターの意向でアバターという仮面が取り除かれている。

現実と同じ自分の姿。現実と異なる世界。法も秩序も、全てが変わってしまい、自分だけが変わらない世界にいる彼ら彼女らは、それぞれがそれぞれの現実を持っている。

自分の持つ現実と異なる現実感を持つプレイヤーとの出会いで変わったアスナには、それが良くわかる。

「貴方は、死ぬことで自分の不幸を終わらせようとしている。この世界も、現実も、色々なことから目を逸らしてる。でも、でもね」

一刻も早く帰りたいと、最前線で戦うプレイヤー。

この世界を楽しみたいと、自分に課した役を演じるプレイヤー。

現実ではできないことを、罪に問われないことを良いことに愉しむプレイヤー。

ヴィクタイムというプレイヤーは、そのどれとも違う。

最も近いのは、恐怖に吞まれ、この世界に絶望したプレイヤー達の

末路。

「貴方が生きること望む人がいることは忘れないで。貴方はたくさんの人を助けてきた。その分、貴方を助けたいと思う人が絶対にいる」

人に助けられ、人を助け、希望を与えてきた人間の最後が、全てをひっくり返すほどの不幸だったなんて、誰が許すだろうか。

繋いだ手には感じるはずのない温もりがある。

「私は貴方を助けたい。何ができるか分からないけれど、貴方に会って、言葉を交わしたい。この手を、現実世界で繋ぎたい」
そして。

アスナは紡ぐ。

この世界で誰よりも天宮遥という少年を知っているが故の責任感と、心のどこかにあつた彼を誰よりも知っているといるという優越感が、口を滑らす。

「それに、貴方のご両親だって——」

アスナが知っているのは彰三から聞いた話だけだ。その彰三も、遥が何故線路に落ちたのかまでは知らない。知っているのは遥だけで、両親の見舞いが無いことから予想を立てた主治医たちが察しているくらいだ。

だから、口を滑らした。

遥にとって、ヴィクティムにとって、最も聞きたくない言葉を。

「……両親？」

「え、ええ。貴方を助けてくれた——」

「僕を利用したうえで殺そうとしたあの人たちのことでしょうか？」

「え？」

「アスナさんはさ、電車で轢かれた時の痛みって想像できる？」

「それは……」

矢継ぎ早に繰り返される質問に、アスナはたじろぐ。

呆然とアスナの話聞いていたヴィクティムは、翡翠の瞳を濁らせてアスナを見つめた。幽鬼のように詰め寄る彼に、僅かでも確かな恐怖を抱いた。

「レールと重たい車輪に何度も轢かれて、足の肉と骨がぐちゃぐちゃになっていくんだ。痛くて痛くて気を失うんだけど、痛みでまた目が覚めて、同じ痛みを繰り返す。体から血が抜けていくのがわかって、死んだ方がマシだって思う。でもさ、アスナさん。でもね」

その瞳でアスナを見上げる。息をする必要のないこの世界で、互いの吐息が感じられる距離まで近づいたヴィクティムが、アスナの頬を撫でる。

「僕はね、駅のホームで背中を押された衝撃の方が忘れられないんだ」「っー」

まるで死神にでも触れられているかのような悍ましさに一気に距離を取る。

およそ2メートル。

しかし、二人の心の距離はそれ以上に離れていた。

「あの衝撃に追いつかれないよう速くなった。でも、どれだけ速くなくてもあの感触は消えてくれない」

そう言つてヴィクティムは腰に差した短剣を鞘ごと放り投げる。リードロップアイテムであるそれを簡単に捨てられる人間は中々いないだろう。

「僕が誰を助けたとか、誰かが僕を助けてくれるとか、もうどうでもいいんだよ。この背に感じる不快感からは逃げられないし、現実に戻れば逃げるための足も無い。不幸な奴として報道されてたし、それを助けようとする奴は利益が欲しいだけだ。このまま誰かの道具にされるくらいなら、僕はここで死ぬ。自由に生きて、自由に走って、誰よりも戦いを愉しんでいる中で死ぬ」

右手を振っていくつかの操作をすると、ヴィクティムの腰に新たな武器が装備される。

「……それで、君に後悔は無いの?」

「まあ、一つあるとすれば、ナーヴギアをくれた先生に感謝したいぐらいかな。けど、そんなのは些細なことだよ」

現れたのは、新雪のように真白な一振りの刀だった。

そも、ヴィクティムは刀使いだ。だが、P o hに出会い、同じ土台

で戦った末に死ぬため、態々不慣れな短剣へと変更したのだ。そして P o h を探している間にも練度が上がり、ついには P o h をも圧倒できるところになってしまった。

しかし、先の戦闘でヴィクティムは P o h が自身に興味を抱いていないことを悟った。もはや短剣を使い続ける意味など無い。

第60層のフロアボス戦のラストアタックボーナス。柄も鞘も真白で、鏢は16枚の花弁の菊を模した、日本では相当に有名な一振り。銘は現実のものをそのまま採用した、魔剣クラススの刀。

菊一文字則宗。

「アスナさんが僕のことを知っているのは分かった。あの二人のことを話したのもアスナさんが初めてだよ。言いふらすのも勝手にすれればいい。だけど、僕の行動を止める権利は無いよ」

「……君はこれから、どうするの?」

「P o h はもう出てこないだろうし、またフロアボスを狙うしかないかな。だって、アスナさんは僕を殺してくれないんでしょう?」

アスナの話聞いていたヴィクティムの胸中には、僅かでも期待があった。自分を助けてくれるかもしれない。この小さな背中に感じる、息が詰まる程の不快感を拭い去ってくれるかもしれないと、自分を知っていると聞いたアスナに期待したのだ。

けれど、彼女が知っているのは、ヴィクティムが天宮遥であるということだけ。

そして今。

彼女を見つめるヴィクティムの瞳には以前と変わらぬ絶望だけが写っている。

「じゃあね、アスナさん。もう二度と、会えないといいな」

持ち前の『はやさ』は使わず、アスナの横を悠々と歩いていく。

浅葱色の羽織と黒い袴。新雪のような刀に、金糸の髪を靡かせた不幸な少年に、アスナは掛ける言葉を見失う。

ぺたぺたと裸足で歩く彼の右足は、現実に戻れば存在しない。もう二度と、彼は自らの足で歩むことはできないのだ。帰る場所にしたつてそう。両親に殺されかけた彼には、帰りを待つ者も、帰る場所も無

い。
彼にとって、現実世界への帰還とは地獄へ堕ちることに他なら
ない。

洞窟の闇に溶けていくヴィクティムに、なんて言葉を掛けられ
いいのか。

「……っ」

アスナの脳内にあるのは、後悔だけだ。

中途半端な説得のせいで、近づきかけた距離を離してしまっ
た。その上、心の傷を開くようなことを喋らせて、そのことに自分
は恐怖して、挙句、彼の望みは叶えられない。

そうして口をついたのは、負け惜しみのような言葉。

アスナの心の内にある、小さな小さな、ヴィクティムへの想
いだ。

「また会いに行く！何度だって、君が生きたいと思えるよう
になるまで、会いに行くから！」

その叫びは、少年の影と共に闇へと消えた。

6話 光明

8

『絶影』は噂話や幻から、実在するプレイヤーの二つ名になった。プレイヤーの名はヴィクティム。53層、60層、71層のフロアボスを単独撃破し、殺人ギルドラフィンコフィンをつた一人で半壊、攻略組と共に討伐した。浅葱色の羽織と、60層フロアボスのラストアタックボーナスであるアインクラッドに一振りしか存在しない刀、菊一文字則宗を愛用している。その容姿は金髪に翡翠の瞳と日本人離れしていて、何より小柄な少女のようだった。

ただ、狂ったように最前線に潜り続ける彼に、多くのプレイヤーが希望を抱いた。

最速で駆け抜ける彼に追いつこうと、攻略組は躍起になって攻略を推し進め、今までにない速度で各フロアが開放されていった。そういう意味では、攻略組に参加こそしていないものの、アスナの思惑は成り功したと言っている。

だが、そんな攻略組に比例するように、ヴィクティムの異常な攻略は度を増していった。

以前までは定期的にエギルの商店で仕入れていた回復アイテムも、今では各フロアが開放されてから一回程度の頻度でしか来なくなっていた。

ただ只管に攻略を続け、誰よりも前線で現実世界までの道を開き続ける少年。

彼が一刻も早く現実に戻りたいのだと、誰もが信じて疑わない。

そんな噂の渦中にいるヴィクティムは、大理石でできた長い廊下をペタペタと裸足で歩いていた。普段の彼なら圏内に帰ることも無く、一人でダンジョンに籠っているのだが、今は珍しいこととあるプレイヤーと歩いている。

ふと、目の前を歩くプレイヤーを見上げる。

深紅のローブに灰色の長髪をまとめた壮年の男性。全身の装備を解除することもないヴィクティムと違い、武器も装備も解除した彼

は、アインクラッド最強ギルドのギルドマスター。この世界で唯一のスキル『神聖剣』を持つことを許された最強の一角。

血盟騎士団団長、ヒースクリフ。

最前線である74層の迷宮区で遭遇し、数回の会話の後、言われるがままに付いてきた。

「さあ、入りたまえ」

そうして通されたのは、血盟騎士団本部の会議室。恐らく幹部が座るのだろう長机に、やけに背もたれの高い椅子が硬質感のある部屋に溶け込んでいる。

その中心の席に、ヒースクリフが着いた。

ふうん、と納得したように部屋を見回したヴィクティムが、机に肘をついたヒースクリフと向き合う。

「で、取引って?」

「話が早くて助かるよ。君のことになるとアスナ君が黙っては無いからね」

「……早くしてくれないかな。僕にもメリットがあるっていうから来たんだけど?」

「落ち着き給え。君の目的はアスナ君から聞いている。間違はなく君の為になる取引だ、ヴィクティム君」

大人と子供の会話にしては、余りに可愛げのない話だ。互いに冗談を叩くタイプでは無いし、どこか互いを警戒している節がある。

そんな中での取引ともなれば、ヴィクティムの口調がいつにもまして悪くなるのは仕方のないことだった。

「随分、アスナさんから聞き出してるんだ?」

「我がギルドの副団長と団長である私が話すことが不思議かね?」

「別に」

「ふむ。では具体的な話に入ろう、と言っても私からの要求はアスナ君と同じだがね」

つまりは攻略組への勧誘。ヴィクティムの速さに加え、その腰に差した新雪のような刀があれば、攻略組の戦力増強になる。それも、ヒースクリフやキリト、アスナと同等以上の戦力強化。ギルド一つ分

の戦力は見込めるだろう。

「ポジションは遊撃。防御も攻撃も自由にするといい。ただ、こちらの作戦の邪魔にならないような配慮だけはしてもらいたいが」

「僕のメリットってというのは？ 経験値とかアイテムならいらんけど」

「攻略に関して言えば、君のメリットはほとんど無い。フロアボス戦にこれまで以上に参加できる程度だろうな」

それだけでも破格の待遇ではある。

フロアボス戦は死の危険があると同時に、同等以上の恩恵がある。莫大な経験値とコル、レアドロップに、運が良ければラストアタックボーナスによるユニークアイテムすら入手可能だ。そして何より、ゲーマーにとっては最大の名誉である攻略組のメンバーであるということ。

目に見えるモノも、見えないモノも、手にすればそれだけでアイコンクラウド内で敬われるようになるモノばかりだ。

「私が君に条件として提示するのは、君の死だ」

「っ！」

だからこそヒースクリフは、そんなものには興味のないヴィクティムが最も欲するものを差し出すことにした。

「90層以降のフロアボスを見て、君を抜いたメンバーでも攻略可能だと判断した時。若しくは、99層攻略後に、私の手で君を殺すことを約束しよう」

「な、んで、アンタがそんなことをしてくれる。僕の目的はアンタに関係ないでしょ」

「これは私の覚悟と受け取ってもらっていい。君の『はやさ』は間違いなく最強に位置するものだ。それを攻略に使わない手は無い」

ヴィクティムの強さと速さがあれば、システム化された攻略をさらに高速化することができる。ひいてはこの世界からの脱出が早くならんと言ひ換えられるのだ。

「攻略の高速化及び戦力強化、その為に君の強さを利用する。君はボス戦での事故死を期待しつつ、最終的にはこの世界で死ぬことができる」

る。この世界から一刻も早く脱する為に、一人の命を切り捨てる覚悟を以て私は君に提案するが、如何かな？」

魅力的な提案だ。断る理由もない。事故死を期待していいのであれば、今までのようにソロでのフロアボス戦も禁止されるわけではない。

唯一の懸念を言うのであれば、ヴィクティムは戦闘時の死を望んでいることだ。

「……一つ聞きたいんだけど」

「聞こう」

「アンタに、僕を殺せるだけの力はあるの？」

殺人のプロフェッショナルだったPohでさえ、興味が無かったとはいえヴィクティムを殺せなかった。

生ける伝説であり、この世界で唯一のユニークスキルを持つヒースクリフは、フロアボス戦でもHPゲージをイエローにしたことが無い。攻防自在のスキルと、それを操る技量で、この世界で最強の一角とされている。

堅牢さにおいては他を寄せ付けないヒースクリフだが、『はやさ』を武器にするヴィクティムとの対人戦において有効かと言われるれば否と答えざるを得ない。ヴィクティムの速さはヒースクリフの盾を掻い潜るのに最適解である為、二人のレベルが同等であるのなら軍配はヴィクティムに上がるだろう。

その相性差をユニークスキルがひっくり返せるかどうか。

「無論、あるとも」

ヒースクリフは気負うことなく答えるが、ヴィクティムはまだ半信半疑だ。

しかし、それもまたヒースクリフの予想内の反応。

「現在の最前線である74層を突破すれば、次は3度目のクォーターポイントだ。前回、前々回と攻略組の士気を折ってきた故に一つ、催しをする予定でね」

「なんの話？」

「攻略組のエース、キリト君と興行を兼ねたデュエルをしようと考え

ている。まだ先方には伝えていないが、間違いなく成立するだろう。そこで私の実力を判断すればいい」

「……なるほど、わかった。もしアンタに僕を殺せるだけの実力があるとわかったら、さっきの条件を呑むよ」

「交渉成立とはいかないまでも、この席についてくれたことに感謝しよう、ヴィクティム君。あわよくば、我がギルドに加入してくれても良いのだが……」

「寝言は寝て言いなよ。それじゃ、僕は行くから。アスナさんと鉢合わせても面白くないしね」

「安心したまえ。アスナ君は非番だ。今日はここには来ない」

「……だといいいけど」

羽織を翻して部屋を出る。

ヒースクリフの提示する条件は魅力的だ。行動が制限されるわけでもなく、自由は確約されたまま今まで以上に戦える。

そして何より、自分の死が約束されている。

ヒースクリフの実力次第ではあるが、今まで不透明だった死という未来が現実味を帯びてきたことに、ヴィクティムは頬が緩むのを自覚していた。

この世界に閉じ込められて二年近く。二つの世界を経て見出した唯一の希望が、目前に迫っている。彼以外からすれば死刑宣告であり余命宣告のそれは、ヴィクティムだけが喜びを見出せる夢のカウントダウン。

この世界を楽しみたい気持ちと、帰らずに死にたい気持ちで舞い上がったヴィクティムは、血盟騎士団本部を後にすると、その足で迷宮区へと向かう。

取引の判断材料を確認するため、71層に続いて早々にこのフロアを攻略してしまおう。

この世界がデスゲームと知って以来、ヴィクティムの足取りは軽かった。

「団長！」

「おや、アスナ君。今日は非番ではなかったかな」

「タイム君、ヴィクタイム君がここに来てましたよね!」

「ああ、そのことか。迷宮区で偶然会ったものでね。幼いながらに最強と謳われる彼に、少しばかり話を聞いてもらっていたよ」

「話? 一体なんの……」

騎士団本部に駆け込んできたアスナは、カツカツとヒースクリフに詰め寄った。

ラフコフ討伐戦以来、フレンド追跡をしても追いつけず、ヴィクタイムに会えないことで不安や焦燥が積もるばかりだった最中に、自らが所属するギルドの団長と探し人が密会している。キリトと友人で鍛冶屋のリズベットの元に赴いていたのだが、話も半ばに切り上げ、貴重な転移結晶を砕いてまで急いで来たのだ。だが、当の本人は既に去った後。ならば、残っているもう片方、ヒースクリフに話を聞くしかない。

「なに、大した話ではないよ。アスナ君が気にしている彼の目的についても、私が触れるには余りにデリケートだからね」

「そう、ですか……」

「うむ。それにしても、彼は運が良いな。いや、彼の場合は実力で勝ち取ったというべきか」

「運が良い?」

「ああ。彼の持っている刀、60層のラストアタックボーナスなのだが、間違いなく魔剣クラスの性能を持っている」

ヴィクタイムとの話は早々に切り上げられ、話題は彼の持つ武器へと変わっていった。実際、ヒースクリフとヴィクタイムの取引を聞けば、アスナは間違いなく怒るだろう。最悪、ギルドを脱退することも考えられる。

そういった意味も込めての話題変更だったが、成功したようだ。

「菊一文字則宗。その性能は、攻撃力を所有者の速度に依存させるというものだ」

「攻撃力を速度に依存、ですか?」

S A Oの武器は筋力要求値が高いほど、一撃の攻撃力が高くなる。

軽い武器は一撃の攻撃力が低いため、ソードスキルも突進系の速度を活かしたものか、連撃のものばかりだ。短剣、細剣、曲刀や刀は、軽いものが多い。一方で、両手剣や斧はその逆で、その中間で軽いものも重いものもあるのが片手剣や槍。

だが、ヴィクティムの持つ菊一文字は、武器そのものの性能を所有者のステータスに依存させるのだ。

その対象が、速度。

筋力要求値が低く、刀スキルを取得している者ならば誰でも装備が可能だが、敏捷値が低ければ、ただの丈夫な刀でしかない。

しかし、敏捷値が高ければ高いほど、一撃の攻撃力は速度に比例して上昇する。

「普通のプレイヤーが持てば、ただのレアドロップでしかないだろうが、ヴィクティム君が持つとなると話は大きく変わる」

例えば、攻略組のエースであるキリトが持つ漆黒の片手剣。50層のラストアタックボーナスで得たそれは要求値が非常に高く、装備可能になるまで多大な時間と労力が必要だった。その分、耐久値、攻撃力共に非常に高く、74層が最前線である今でも一線級の武器であることは間違いない。

菊一文字は、ヴィクティムが持つことでキリトの持つ片手剣、エリクシデータと同等以上の性能になる。

「ヴィクティム君は疑うまでも無くアインクラッドで最速だ。迷宮区で見たが、通常であればあり得ない敏捷値を誇っている。その敏捷値に比例した攻撃力ともなれば、ソードスキルを使わずとも同等以上の攻撃力を生み出せるだろう」

ユニークスキル、と言われても納得できる。

神聖剣とヒースクリフ。その組み合わせに匹敵するレベルの凶悪さだ。

だが、アスナが感じたのは凶悪さや武器と所持者の組み合わせに関する如何ではなく、ただただ安堵だった。強力な武器を持てば、それだけで生存率は跳ねあがる。ヴィクティムが死ぬ確率が少しでも減っていることは、アスナにとって自分の命と同じくらい大事なこと

だ。

「そんな武器が、ヴィクティムの手に……」

「本来なら攻略組内で取り合いになってもおかしくなかったが、彼の場合は単独でのボス撃破の末に手に入れている。得るべくして得たと言っべきだろう」

「そうですか、よかったです。それじゃあ私は行きます」

「ああ。では、また明日」

入ってきたばかりの部屋を出ていく。リズベツト武具店に戻るのか、いつものようにヴィクティムを探しに行くのか。どちらを選ぶのかは知らないが、ヒースクリフにとってはどちらでもいい。先の取引が決まるまでにアスナが死ななければ、それでよいのだ。

血盟騎士団の団長はヒースクリフだが、直接の指揮を執り、彼と同等に信頼の厚いアスナが、唯一弱みを見せる相手。ヴィクティムの攻略組への加入と、それに付随するヴィクティムと会う機会の増加は、アスナ自身の士気を上げる。

そうなれば、アスナは精神的にヒースクリフの代わりに務められる。

いずれ来る攻略組の変化に、アスナは必要不可欠だ。

その為にも、ヴィクティムには生きていて貰わなければならない。いつか必ず殺すとわかっている。

7話 共闘

9

74層の攻略。それは、攻略と呼ぶには強引すぎるモノだった。

25層での攻略部隊壊滅以来、第1層を支配していた巨大ギルド『アインクラッド解放軍』の攻略パーティが単独でボス攻略に挑んだのだ。レベルも武装も安全マジックには遠く及ばない彼らは、迷宮区での戦闘で疲労困憊になりつつ、無謀にもフロアボスへ挑んだ。

結果を言えば、25層の二の舞になりかけた。

道中に出会ったキリトと風林火山、ヴィクティムの捜索をしていたアスナが駆け付けなければ、間違いなく全滅していただろう。

その最中。少人数でのボス戦に危機を感じたキリトが、この世界で二つ目となるユニークスキル『二刀流』を発動した。現在分かっているスキル中、最多連撃を誇る16連撃のソードスキルを以て悪魔のようなフロアボスを撃破。計画性も無ければ勝算も薄かったが、攻略組でも高レベルなチームワークを発揮できるメンバーが揃っていたことと、キリトのユニークスキルが幸いしたのだった。

偶然に偶然が重なり、少人数でのフロアボス攻略となったが、それを知ったプレイヤーの興味はキリトの二刀流だった。ヴィクティムの単独撃破という前例があるからか、少人数での攻略については一切触れられなかったのだ。

ともかく、74層の攻略は終了し、誰もが次のクォーターポイントに目標を置いていた。

今までも油断していたわけじゃない。死の恐怖に競り勝ち、ボス攻略を比較的安全に推し進め、他のプレイヤーの為にレッドプレイヤー討伐戦を敢行し、粛々と攻略を進めてきた。

だが、それ故に彼らは過去の悪夢を思い出してしまう。

フロアボス戦での死者数の大半を占める、25層と50層での攻略戦。死ななかつた彼らにも恐怖を植え付けた先の戦闘は、次の攻略まで多大な時間を必要とさせた。

75層の攻略は、それ以上の死者を出すかもしれない。

74層攻略と同時に75層での情報収集を始めてはいるものの、クォーターポイントでは何があっても不思議ではないのだ。74層のボス部屋では回復結晶や転移結晶が使えなかったことを見るに、結晶が使えない可能性も高い。

過去最大の難関。

だが、彼らには希望もあった。

それこそがヴィクティムの、絶影と呼ばれる最強の一角たるプレイヤーの攻略組への参加だ。

「久しぶり、アスナさん」

『神聖剣』ヒースクリフと『二刀流』キリトのデュエルは、下層のプレイヤーをも呼び寄せ、アインクラッドで生存しているプレイヤーの半分が観戦に来るほどの興行だった。

両手に携えた二刀を苛烈に振るい、生ける伝説を追い詰めるキリト。

その猛攻を的確に十字盾で撃ち落とすヒースクリフ。

第一層が攻略されたことを知った時程の盛り上がりを見せたデュエルは、キリトに僅かな疑問を抱かせつつもヒースクリフの勝利で幕を下ろした。

最後の一瞬で見せた、弾かれた盾を引き戻すあり得ない速度。まるで彼以外の時間が遅くなったような感覚。

奇妙な感覚を残したデュエルは、出店を出していた商人たちにも多大な利益を齎し、ヒースクリフが団長を務める血盟騎士団とキリトは、見慣れない額の収益を得ることになった。

そんなデュエルで、ただ一人盛り上がることなく、冷静にヒースクリフの実力を見極めていた者が一人。

ヒースクリフとの取引を結ぶか決める為、早々に74層を攻略してしまおうと考えたヴィクティムは最速でボス部屋まで辿り着いた。しかし、そこにやってきたパーティを見て、一人でやるより複数で攻

略したほうが早いだろうとその場から離れたのだ。そこにはゲームに詳しくなく、たった一人で攻略をし続け、この世界で人との関わりを持ってこなかったが故の勘違いがあった。

SAOのフロアボスはレイド仕様であり、フルメンバーで1時間かかるのが常だ。ボスの特性によって多少前後するだろうが、パーティ一つで攻略することなど基本的には無い。その上、マツピングしながら迷宮区にやってきて、そのままボスへ挑むプレイヤーは皆無だ。

つまり、軍の暴走と、迷宮区に居たアスナ達との遭遇がなければ、ヴィクティムの想定していた最速にはならなかったのだ。そういう意味では、74層攻略に置いて最も運が良かったのはヴィクティムともいえる。

そんな偶然があつたとも知らず、ヴィクティムは二人のデュエルを選手入場口から観戦し、取引に応じることを決めた。決定打となつたのはヒースクリフの実力がヴィクティムを殺せるレベルだった、という訳ではなかったが、それでも彼は攻略組のボス戦に助太刀することを決めたのだ。

そのの意味するところは、忌避していたアスナとの再会。

「ティム君、今日はよろしくね」

「うん、って言っても、僕は遊撃だからあんまり関係ないけどね」

「そんなことないわ。私たちのギルドが指揮を執る以上、絶対に誰も死なせない」

もちろん、貴方も。

言外に伝えるアスナから目を逸らし、ヴィクティムは周囲を見渡す。

誰もかれもが見た目は子供で、初見で見慣れないヴィクティムを見ている。ただ、噂だけは聞いたことがあるのか、コソコソと影で話している。

そのことに目を細め、小さく舌打ちをすると同時に、転移門が輝く。

光の中から現れたのは、深紅の鎧に身を包んだヒースクリフと血盟騎士団のメンバーだ。

「あんまり気負いすぎないほうがいいんじゃない？血盟騎士団のトツ

「プはヒースクリフでしょ？」

「そうだけど、私が貴方を死なせたくないの」

数か月ぶりの再会だというのに、それを感じさせない会話を続ける。

ヴィクティムは元より人と会う回数が少ない生活を送っていたので違和感はないが、あれだけ必死にヴィクティムを探していたアスナが落ち着いているのには訳があった。

「それに、ようやくティム君を守れる場所に来たんだもの」

自分の手が届かない場所に居たヴィクティムが、危険なボス部屋とはいえ手の届く場所にいる。例えば攻略組全員が死んでしまうようなボスだったとしても、彼だけは生かしてみせる。その為に、自分の実力が発揮されないなんて状況も、精神状態も作ってはならない。守りたいのなら、自分の全てを賭けて守る。

正直なところ、アスナがヴィクティムを守りたいと思う理由の大半は憐みだ。不幸な人生を送ってきた少年に未来を与えたい。その程度だ。

けれど、アスナにとってはそれが大事だった。

親や教師、クラスメイト達の期待に応え、敷かれたレールの上から落ちないように生きてきた。

それが仮想世界に来て台無しになったと思った。けれど、ここも現実だと思うようになり、初めて自分の意志で現実に戻ること以外の決意をした。

自分勝手な決意であることは分かっている。彼にとって屈辱的な憐みかもしれないことも知っている。

それでも、彼には生きていてほしい。

「そう。僕は自由にやるから、アスナさんもご自由にどうぞ」

「うん、絶対に生きて帰ろうね」

噛み合っているのか微妙な会話を続ける二人を余所に、今回のレイドリーダーを務めるヒースクリフが青い結晶を掲げる。

「コリドー、オープン」

回廊結晶と呼ばれるそれは、ラフコフ討伐戦でも使われたもので、

一度行ったことのある場所を設定することで一度だけ転移が可能になるレアアイテムだ。討伐戦では監獄エリアを設定していたが、今回は75層のボス部屋前を設定している。

ヒースクリフに続いて光のゲートを潜り抜けると、そこには巨大で禍々しい扉がある。辺りは薄暗く、迷宮区に入ったのだと分かった。「よう、ヴィクティム」

ここに来て話しかけてきたのは、黒い肌の巨漢。ヴィクティムが行きつけていた商店の店主にして、攻略組でも上位の攻撃力を誇る斧使い、エギルだ。

「およ、エギルさん。なんでいるの?」

「ボス戦の戦利品で一儲けするために決まってるんだろ」

「おお、頭撫でないで。結ぶのめんどくさいんだから」

「悪い悪い」

はっはっは、と大きさに笑うエギルに釣られて、口角を上げるヴィクティムと微笑むアスナ。その周囲には、いつの間にかキリトと風林火山がいて微笑ましく眺めていた。

「さて。基本的には血盟騎士団が前衛にてボスの攻撃を受けるので、その間に可能な限りボスの攻撃パターンを見極め、攻撃に転じてほしい」

アインクラッドで精鋭中の精鋭を集めたレイドの先頭で、赤い鎧を纏い、十字の大楯と銀の剣に手をつけて、今回の作戦の概要を説明する。

と言っても、作戦なんてあつて無いようなものだ。75層のフロアボスについては情報が一切ない。フラグクエストも見当たらず、前の層までならばあつた前情報が無かった。その上、直接ボスの情報を掴むために送り込んだ先遣隊は、ボス部屋に入るとともに扉が閉まり、十分後に開いたときには消えていた。生命の碑を確認してみれば、先遣隊のメンバーは全員が死んでいて、ボスの姿もわからない。

今まで攻略を進めるうえで最も重要だった『情報』という武器が無い。

クォーターポイント。前層のボス部屋での結晶無効化エリア。

たった十分で先遣隊とはいえ攻略組のパーティを全滅させられる攻撃力。人型なのか、そうでないのか。武器の種類さえもわからない。だからこそ、高レベルのタンクが揃う血盟騎士団が前衛を担う。トップギルドとしての責任感もあったかもしれない。

「今回のボスに関しては情報がほとんど無い。しかし、諸君らであれば必ずや次の層に進めると信じている。さらに、本作戦には私の神聖剣、キリト君の二刀流に加え、かの絶影が参加している」

その言葉にざわめき立つ。絶影の名は、ユニークスキルに匹敵するレベルで知れ渡っているのだ。

その様子を見て笑みを浮かべたヒースクリフは、すぐに真剣な表情に戻り、盾を構えて剣を抜いた。

剣を掲げて、叫ぶ。

「解放の日の為に！」

ボス部屋の扉を開き、レイドメンバー総勢48名が己の武器を掲げて突入する。その最後尾に、菊一文字を右手に持ったヴィクティムが続いた。その姿に緊張は無く、死ぬことを恐れている他のメンバーとは明らかに違う。

笑っている。

一瞬だけ振り返ったキリトが、ヴィクティムを見て恐れを抱く。この状況で笑っていられるプレイヤーの存在を信じられないのだ。思えば、ラフコフ討伐戦の時も彼は笑っていた。

しかし、直ぐに目の前の状況に集中する。

一歩間違えば死ぬのは自分で、仲間で、愛している恋人だ。アスナがヴィクティムを死なせたくないのと同じように、キリトも彼らを死なせたくない。

「……何も、起きないぞ」

全員がボス部屋の中に入るとともに、重く巨大な扉が閉まっただけ。先遣隊と同じ、脱出不能のギミックだ。

しかし、真つ暗な部屋の中では何も起きず、攻略組の装備の音だけが僅かに聞こえる。

そのうち、誰かが警戒しつつ呟いたその瞬間。

メンバーの最後尾にいたヴィクティムが低い姿勢で走り出した。

「ヒースクリフ！飛ばして！」

ヒースクリフの後方からプレイヤーの間をすり抜けるようにして駆ける。そこから跳躍し、即座にヴィクティムの言葉に反応したヒースクリフが斜めに構えた盾に飛び乗った。

「ぬ、ん！」

次の瞬間、ヒースクリフの裂帛の気合と共に天井へと打ち上げられた。

まるでロケットのように天井へ飛翔するヴィクティムは、刀を両手に持ち直し、天井に張り付いていたそれを切り裂く。何を斬ったのか、確認する前にそれは落下していく。対してヴィクティムは勢いのままに天井へと着地し、刀を突きたてて蜘蛛のように張り付く。

「でつかいなあ。でも、強そうだ」

さかさまになったまま見上げて、落下したそれを見る。見た目を言うのなら巨大骸骨ムカデといったところか。骨だけの体に、体軀に見合う鎌の両腕。速度特化のステータスに、速度を攻撃力に転化する菊一文字で攻撃しても殆どHPが削れていないのを見るに、耐久力も相当なものだろう。

「ふふ、攻撃力はどんなもんなあ」

眩くなり天井を蹴って、今度は隕石のように巨大ムカデの後を追う。5秒にも満たない時間でヒースクリフの隣に着地したヴィクティムは、衝撃を殺すために曲げた膝を一気に伸ばして駆けだす。

巨大ムカデ型のフロアボス、ザ・スカルリーパーはヴィクティムの攻撃など意にも介さず、落下後もしつかりと着地していたらしい。流石というべきか、ヴィクティムを打ち上げたヒースクリフの指示のおかげで踏み潰されるプレイヤーはいなかった。しかし逃げ遅れた者はいたようで、キリトや風林火山の面々が早くボスから離れるように叫んでいる。呆気に取られていたプレイヤーも急いで逃げるが、スカルリーパーの攻撃の方が早かった。

それは命を刈り取る死神の鎌に等しい。人間二人をたったの一撃で真つ二つにできる、人間の天敵。

不意打ちにも等しい天井からのフロアボスの登場。早々に精鋭の攻略組二人が消えてしまうのは痛手だが、それすらも仕方が無いと思えた。

だが、逃げ遅れた二人より早いボスの攻撃、よりも速く動いた者がいた。

「はっはは！重っ！」

二人に迫る巨大な凶刃を下から跳ね上げる。軌道の逸れた鎌は逃げ遅れた二人とヴィクタイムの頭上を通りすぎていった。

「あ、ありがとう……！」

「助かった、って、おい！」

「っさい！ヒースクリフ！……この役目貰うからね！」

感謝の言葉を一蹴し、最も死の濃密な居場所を選択する。

たった一合とはいえ攻撃を与え、防いだ。

誰よりも早くボスと攻防を行ったヴィクタイムが判断した、最も危険な場所。単騎ボス撃破という偉業を為してきた絶影がそう判断したのなら、ヒースクリフはそれを是とするのみ。どのみち、菊一文字によって攻略組でもトップレベルの攻撃力を持つようになったヴィクタイムでさえ逸らすのが精一杯なら、あの速度と攻撃力に耐えられるの人材は限られてくる。

「ふむ。では、あの鎌は私と彼で引き受けよう」

「僕一人でいいんだけど！」

突進を続けるスカルリーパーの正面で両腕の鎌を相手取りながら叫ぶ。だが、ヴィクタイムが一人で相手取った場合、彼が死んでしまえば一から攻撃パターンを把握しなければならない。そうなれば、ただでさえ時間にかかるボス攻略にかかる時間は計り知れない。

あくまでも効率を重視し、ヴィクタイムの死については度外視した判断のもと、新たにポジションを決定する。

「皆は側面から攻撃してくれ。キリト君は状況次第でヴィクタイム君とスイッチすることになるかもしれない」

「ああ。攻撃パターンも可能な限り把握しておく」

「ああ、よろしく頼むよ」

もう一人の最強候補に言い残し、ヴィクタイムの隣に立つ。そして、他のメンバーは指示に従って側面からの攻撃を開始する。

だが、スカルリーパーの巨体はムカデのような多足にも攻撃判定があるようで、普段のような攻撃も行えない。レイドの中で取り決めたタンク隊やアタッカー隊の意味が全くない現状は、各プレイヤーがそれぞれの意志で防御、攻撃、回復、回避を行わなければならなかった。異質なボス攻略の中で、普段通りに攻撃を捌くヒースクリフとヴィクタイム。

不敗伝説とユニークスキルを持つヒースクリフは危なげなく盾と剣で防ぎ、ヴィクタイムは最速の名に相応しい速度で躲し、逸らす。

二人の姿に、いつもと異なる攻略に戸惑っていた攻略メンバーも、徐々に調子を取り戻していた。

それでも、相対したことの無いムカデ型のモンスターに攻撃の手は遅々として進まない。

「クソ！まともになづくこともできねえぞ!!」

エギルが攻撃部隊の心境を代弁して叫ぶ。

そしてもう一つ、ボス部屋の中で高らかに響く声があった。

「あはは！掠っただけでこの威力！すっごい！あはははは！」

面白くて仕方がないといった風で、声変わりしていないハスキーな笑い声。飛び跳ねつつ、持ち前の速さで助走、攻撃を繰り返すヴィクタイム。態々、助走の為に大きな一歩で下がり、攻撃力を上げるヴィクタイムの運動量は他のプレイヤーに比べて倍近い。

だからだろうか。

まだまだ把握しきれしていないボスの攻撃パターンに含まれるフェイントに引っ掛かり、自身の攻撃を躲された挙句、迫る刃に対して無防備になってしまった。

「は」

猛烈な勢いで迫る鎌を躲すには、あと一歩足りない。

彼が望む死という未来は、もう一歩で辿り着く。

しかし、彼の望みは、ここでは未だ敵わない。

「セアッ！」

流星のような打突が迫る鎌の軌道を変える。まるで、ヴィクティムが二人のプレイヤーを救ったシーンの再現のようだった。

「ヴィクティム君、無事？」

「え、あ、うん」

「言ったでしょう、君を守るって」

崩れた体勢を持ち直し、ボスと自分お間に立つアスナを見上げる。

「……別にいいのに」

「むくれてもダメ。ここからは二人でやるよ」

「ええ？」

強引なアスナに頬を膨らませるが、何を言っても聞かなさそうな彼女に渋々並び立つ。

互いに細剣と刀という速度重視の武器。重量だけで言えば不適應極まりないが、二人の精度と速度は相性を打ち消して余りある。

「フツ、そちらは任せるよ。アスナ君、ヴィクティム君」

「はい、団長」

「今回だけだからね？次は一人でやるからね!？」

そして二人は駆けだした。

ヴィクティムが猛烈な速度により鎌は弾き飛ばし、アスナがそれに合わせてヴィクティムの攻撃の後押しをしたり、空中に出るヴィクティムのフォローを行う。

攻略組最速の二人のスイッチは、声をかけることも無く行われた。絶影と閃光。

白銀の剣閃が巨大な鎌を吹き飛ばし、流星のような刺突が影に迫る脅威を打ち払う。

まるで舞曲のように駆ける二人に感化され、攻略組の士気が復活した。

クォーターポイント。体全てに攻撃判定があり、それすらも直撃すれば即死級のものばかり。現にヒースクリフ、アスナ、ヴィクティムの三人が二振りの鎌を相手取るようになってから、多足と尻尾による攻撃で二人が死んだ。

それでも、彼らは凶悪に凶悪を重ねた最悪のフロアボスを倒さねば

ならない。

既に不転の状況であるのもそうだが、何よりこれを倒せるのは彼らだけなのだから。

8話 犠牲

10

「総員、突撃！」

5本あったHPバーは残すところあと一本。その一本も、既に赤く染まっていた。

ヒースクリフの指揮によって全員がソードスキルをスカルリーパーに叩きこんでいく。スキルを使わないヴィクティムはと言えば、体長の長いスカルリーパーの頭に乗り、刀を突きさしたまま尻尾まで駆け抜けていく。

誰にも見えない一筋の赤いラインが刻まれたのと同時に、ヴィクティムの足元が光り輝く。それを見て即座に飛び降りた彼の背後で、攻略組を苦しめたスカルリーパーが霧散した。

「……」

今まで見たことも無い量のポリゴン片が舞う中、誰一人として歓声を上げなかった。

いつだって熾烈なボス攻略が終われば、誰もが喜びと安堵に声を漏らしていた。誰がMVPだとか、あの時の攻撃は危なかったとか、戦闘の振り返りをしながらも笑顔で戦利品や次の層の話をしていった。

しかし、今の彼らにあるのは途轍もない疲労感。

「何人、やられた……？」

その場に座り込んで呟いたクラインの言葉に、レイドメンバーの数を数えたキリトが答える。

「10人、死んだ」

「ウソだろ……？」

50層以来のボス攻略での死者。しかも、その誰もが一撃で死んでいくところを見てしまった。

この後の階層を守護するボスモンスターが全て同レベルかそれ以上であるのか。その疑問を、エギルは続ける。

「俺たちは、てっぺんまで辿り着けんのかよ……!?!」

誰もが先のことを考えて絶望する。だが、先のことを考えている分、まだマシかもしれない。絶望しても前を向くその姿勢がなければ、彼らの足は完全に止まっていた。

そんな彼らと一線を画す実力と精神力を持つ者が二人。

誰もが座り込む中、立ったまま超然とした雰囲気をつ纏い、生き残ったメンバーを見下ろすヒースクリフ。

つまらなさそうに刀を置いて、アスナに手を繋がれていなければ今にも次の層へと飛び込んでいきそうなヴィクティム。

どちらもスカルリーパーの強力な鎌を防ぎ続けた猛者であり、どこか浮世離れた雰囲気を持つ二人だ。

けれど、やはり違う。

自分の為に周りを顧みることも無く、自力で目的を果たそうとするヴィクティムは、どこまでもプレイヤーであり人間臭かった。ラフコフ討伐戦前に見た、楽し気に彼らを狩り尽くす姿。討伐戦後の沈んだ表情。アスナと会話する姿と、それ以外に見せる拗ねたような表情。ソードアート・オンラインが感情を過剰に見せるシステムであることを考慮しても、人間としての感情で人と接していたように見える。

しかし、ヒースクリフは違う。

どこまでも聖騎士。どこまでも超然としていて、人間離れたような、他のプレイヤーとは元々立っている場所が違うような。

そして脳裏に、75層攻略前の興行として行った時のデュエルが蘇る。

最後の一瞬。確実に入ると思った最後の一撃を防がれた時の、あり得ない速度。

「ふいふ」

何かに気づいたキリトの様子を遠目に見たヴィクティムがぐもった笑いを溢す。誰にも気づかれぬ二人の言動。その理由は同一のものだ。

過ったのは一つの可能性。もし間違えば、キリトは犯罪者どころかトッププレイヤーを束ねる聖騎士殺しとして奴隷的扱いを受けるかもしれない。

それでも、もしそうであるならば。

「……ッ！」

放つのは片手剣スキルの単発重攻撃、ヴォーパルストライク。プレイヤーを見下ろすように佇む聖騎士の首元を狙って最速で駆ける。誰もが気を抜いている中、その姿に気が付いて目で追えたのはたった一人だった。

目前に迫るキリトに気が付いて、盾を持ち上げても遅い。僅かに盾の上を過ぎた黒い片手剣は、しかしヒースクリフの首元を貫くには至らなかった。

黒い魔剣の切っ先の進撃を阻み、ヒースクリフの命を守ったのは紫色のメツセージ。

「システムの不死、って、どういうことですか。団長！」

Immortal Objectと書かれた警告はすぐに消え、代わりに座っていたプレイヤー達が立ち上がる。警戒と困惑を混ぜた感情を心に宿し、武器を手にする。

「この世界に来てから、ずっと疑問だったことがある」

キリトは語る。この世界を完成させ、観測することが目的だと言った茅場晶彦は、一体どこで自分たちを観測しているのか、と。そして、他人がやっているゲームを傍から見ていること程つまらないものはない、と。

そこから導き出される結論を口にする。

「なあ、茅場晶彦」

聖騎士ヒースクリフの正体。この世界で初めてユニークスキルを取得し、攻略組を先導してきた。誰からも信頼され、希望とされてきたプレイヤーが一転、絶望の魔王になる。

最悪のシナリオを語るヒースクリフに、引きつった笑みで答えるキリト。

緊張状態の会話に、一つの笑い声が響いた。

「アハハ、やっぱりバレちゃったね、ヒースクリフ」

「やはり君もか。参考までに、いつ気付いたのか教えてもらえるかな？」

「……この前のデュエル、最後の一瞬だけアンタ早すぎたよ」

「その黒いのと一緒だね。まあ、アンタが誰でもいいから言わなかったけど」

契約もあつたしね、と口の中で呟く。

「そうか。あれは私としても痛恨事だった。キリト君の攻撃に気圧されて、ついシステムのオーバーアシストを使ってしまった」

「あれ僕と同じくらい速かったもんね」

傍から見えていたヴィクティムも、ヒースクリフの異常な速度には気づいていた。むしろ、それに気が付いたからこそ、彼はヒースクリフとの契約を結んだのだ。

硬さだけが取り柄なら、ヒースクリフはヴィクティムの敵ではない。速さで翻弄して、背後からの一突きで終わりだ。けれど、そこにオーバーアシストによるあの速度が加われれば、逆にヴィクティムの方が手も足も出なくなる。

つまり、ヒースクリフがヴィクティムを殺すという約束の信憑性が確固たるものになったのだ。

「そんで？ 正体がバレちゃったヒースクリフサンはどうすんの？」

ただ一人、足を延ばして座ったまま話を続けるヴィクティム。

正体のバレた魔王がすることなど相場が決まっている。煙に巻いて魔王城で勇者を待つか、もしくは。

「最終的に私の前に立つのはキリト君だと予想していた。二刀流は全てのプレイヤーの中で最も反応速度の速い者に与えられる。その者が魔王に対する勇者の役割を担う筈だった」

そう言つてキリトの傍に寄つてきたサチを見やる。

「だが君は私の予想を超える力を見せてくれた。そして、ヴィクティム君」

「ん？」

「もしキリト君が途中で折れるか、死んでしまった場合は君が私の前に立つはずだった。そういう意味では、君との契約は元々守れなかった。それについては謝罪しよう」

「あつそー」

つまらなさそうに返答するヴィクティムに対し、満足そうに頷く
ヒースクリフ。

それだけのやり取りを躲し、視線をキリトへと戻す。
が、彼らが話を進めるよりも先に、血盟騎士団の団員が行動へ移す。
あまりにも短気なそれは、忠誠を誓ったリーダーが、姿を偽った魔王
だったことに対する怒りだ。裏切られた者達の感情を一身に、感情的
に剣を握った。

「よくも……よくも、俺たちの忠誠を——!!」

名も知らないプレイヤーの動きを見ていたヴィクティムは思う。

忠誠など糞喰らえ。何故この自由な世界で、自ら縛られるような制
約を課すのか。別にバカにしているわけじゃないが、自分には到底で
きないだろう。

何故なら、彼が今感じている悔恨や怒りは、ヴィクティムが仮想世
界に来る前に感じていたものと同種のものなのだから。

しかし、ヴィクティムと違い武器を握った彼の刃は、ヒースクリフ
には届かない。

スツと手を振ったヒースクリフが一秒にも満たない時間でいくつ
かの操作をすると、飛び掛かったプレイヤーの動きが止まる。

「な……!」

「キリトお……!」

「クライン、エギル、アスナ!皆!」

それだけじゃない。キリトとヴィクティム以外のプレイヤーが
次々と倒れていく。

「お、アスナさん大丈夫?」

「ティム君は……?」

「僕は大丈夫みたいだね。あの黒い人も」

二人以外のプレイヤーを強制的に麻痺状態にした当の本人は、キリ
トと向き合う。

まるでテレビを見るような気楽さで二人を観戦するヴィクティム
の手は、変わらずアスナと繋がっていた。

「どうする気だ。ここで全員殺して隠蔽する気か?」

「まさか。少し早いが、私は第100層の紅玉宮にて君たちを待つとしよう。なに、君たちなら必ず辿り着くと信じている。が」

ダンツ、と鞘を兼ねた大盾を地面に着く。

「その前に、私の正体を看破した報酬を与えなくてはね」

ヒースクリフの言う報酬とは、この場で一对一の決闘。つまりは、SAOクリアのチャンスが与えられているのだ。不死属性は解除され、HP量も同じ状態から始まる。完全なプレイヤーの実力が全ての、平等なデュエルだ。

ただ、デュエルをするのはたった一人。もう一人には、デュエルをした方が負けた際に、ユニークスキル若しくはユニーク装備を与えられる。

勇者の役割を持つキリトか。死の契約を結んだヴィクティムか。

判断は二人に託された。

「……ヴィクティム」

「好きにしなよ。僕はどっちでもいい」

「そうか……ありがとう」

「感謝されるようなことじゃない。僕としては、アンタが死んでくれた方がいいけどね。まだまだゲームを続けられるし」

「はは、笑えないな」

「冗談じゃないもん」

「……ほんとに笑えないな」

そう言っただけキリトはこの世界で出会った大切な友人たちの元へ向かう。

二刀流は魔王に対する勇者が持つスキル。彼の背負う二刀には仲間の想いだけではなく、魔王たる茅場晶彦から与えられた役割という重荷が宿っている。

だからこそ選ぶのは、その二刀で魔王を打ち倒す選択。

対してヴィクティムは、望みを叶える最後のチャンスかもしれない状況であるにも関わらず、終始穏やかだった。

「ねえティム君」

そんな彼に、麻痺に倒れながらもヴィクティムの手を握り続けてい

るアスナが聞く。

何故、そんなにも穏やかでいられるのか。君の願いを叶えたいわけじゃないけれど、君が求め続けたモノを手に入れる最後のチャンスなのに。

現実世界に戻れば、天宮遥は想像を絶する地獄を生きていくことになる。

2年間で衰弱しきった体を元に戻すリハビリに加えて、仮想世界に来てしまったが故に慣れることも無かった左足だけの生活。里親の家族とも連絡はつかず、退院した先のことは全くの不透明。

それらが嫌で、君は死にたかったんじゃないのか。

アスナは問う。

けれどヴィクタイムの反応は淡白なものだった。

最後の会話を終えたのか、ヒースクリフと向き合い、両手の剣を構えて走り出すキリトを見ながら答える。

「僕はこの世界を作ってくれた茅場に感謝してる。本物の死があるこの世界を、自分の足で駆け抜くことができた」

決闘は静かに始まり、デュエルとは比較にならない苛烈さで進んでいく。

「あいつは、二刀流を持つ者に勇者の役割が与えられるって言った。そして、自分が魔王だって」

SAOはMMORPGだ。クエスト中の役割や職はあっても、物語のキャラクターのような役割は無い。

それでも、茅場晶彦は魔王と勇者という役割を口にした。

「これまで自由にやってきた。誰の迷惑も考えず、誰かに縛られることも無く。だったら、まあ最後くらいは、あいつの好きそうなことに協力してやってもいいかなって思ってたさ」

この世界のルールは茅場晶彦だ。

剣だけの世界。魔法は無い。無限にも思えるスキルに、ステータスが全ての實力世界。そして、現実の死。

彼が定めたルールに則り、定めなかったことは自由なこの世界が、ヴィクタイムにとって最も居心地のいい世界だった。

里親の二人も、その子供も。自分の体のおかげで生き延びた患者も、世界的に珍しい症例で脚光を浴びた医師も。自分を縛る何者もないこの世界は、まさしく理想郷だった。

だからこそヴィクティムは、そんな世界を作り出した茅場晶彦に心から感謝している。

「アスナさんはさ、生きて帰りなよ。僕を守るって言うてきちんと守り通したことはすごいと思うし、実際、さっきのボス戦でアスナさんが居なかつたら5回は死んでたと思う」

キリトの猛攻を精密に十字盾で叩き落とすヒースクリフの表情には余裕がある。対して、ソードスキルを使えない、使っては勝てないキリトの表情は必死そのもの。今まで幾度となく敵を屠ってきた究極の必殺技は、ラスボスたる茅場晶彦がデザインしたものだ。使えばすべての技を叩き落された挙句、スキル後の硬直を狙われて終わるのだ。

鉄と鉄がぶつかり合う音が響く。

「自分で決めた意志を貫き通す力を、アスナさんはもう持つてる」

「な、なんで、それを……!」

「僕を通して何かを為そうとしたのは気付いてたよ。でもまあ、僕を利用するって感じでもなかったから放っておいたけど」

今まで利用されてきて、それに気が付き、二度とそうはならないと誓ったヴィクティムだからこそ気が付いたアスナの心理。

シウルと羽織と同じ浅葱色の髪紐を解き、左手を握るアスナの手に握らせる。

「僕はヴィクティム。誰かに利用され続けた生贄だ。現実に戻れば、僕はまた生贄になっちゃう。だから、ここでの役割と一緒に、僕は死ぬ」

脇に置いた菊一文字を持って、生贄を名乗る少年が立つ。

美しいブロンドを靡かせるその姿は、生贄と呼ぶには綺麗すぎた。少女のような見た目の彼は、優しい笑みを浮かべてアスナを見やると、直ぐにその笑みを別のものにする。

犬歯をのぞかせ、凜猛に笑い、死ぬために走る。

「ダメ……ダメよ！行かないで、タイム君……！」

「さよなら、アスナさん。ああ、もし現実に戻って僕のが気になったら、横浜港北総合病院に行ってみるいいよ。ついでに、倉橋って先生にSAOを貸してくれてありがとうって言っておいてくれると嬉しいな」

きつと、責任を感じてるだろうから。

言い残したヴェイクティムは駆ける。アスナの言葉よりも早く駆けたヴェイクティムの向かう先は、ヒースクリフの反撃を掠め、激情のままにソードスキルを発動してしまったキリトだ。27連続の二刀流ソードスキル『ジ・イクリプス』をシステムのように弾かれ、最後の一撃で青い片手剣が盾に阻まれ砕け散る。

「さーらばだ、キリト君」

紅い燐光を纏った十字剣が振り下ろされる。

魔王によって、勇者が死ぬ。在ってはならない物語だけれど、この世界はゲームであり現実だ。どんな非情な現実であっても、この世界に居る以上は受け入れなければならない。

だが。

「ぎんねん」

ノンフィクションであれば、キリトは死んでいた。誰もかれもが麻痺によって動けず、唯一動けるヴェイクティムとはほとんど関わりが無い。そういう意味で言えば、キリトの命を救ったのもまたヒースクリフ、茅場晶彦だとも言えた。

「勇者を魔王の一撃から救う、なんてのも王道でアンタ好みなんじゃない？」

「ふっ、それを言うのなら一撃で死んでおくべきだったな、ヴェイクティム君」

魔王の攻撃で死ぬはずだった勇者を間一髪のところまで仲間が救う。まさにファンタジーの王道だ。

ヴェイクティムが予想した通り、茅場は至る所に王道らしい要素を盛り込んでいる。魔王と勇者の立ち位置然り、ギルド名然り、アインクラッドの各階層のテーマ然り。

キリトを蹴り飛ばし、ヒースクリフのソードスキルをその身で受けきったヴィクティムが刀を抜く。

「アンタのソードスキルが貧弱なだけでしょ」

「ソードスキルを一度も使わなかった君に言われるとはね。それはさておき、これはどうしたものかな。あくまでも指定したのは君たちのどちらかとの決闘だったが」

「一回くらいチャンスがあってもいいでしょ。アンタだって、こないだのデュエルでズルしてるんだし」

「それを言われると弱いな。よかろう、それでは仕切り直しを」

「する前に、僕とは個人的に戦ってもらおうよ」

「……ほう？」

刀の切っ先をヒースクリフに向ける。ヒースクリフは鋭い視線を向け、蹴り飛ばされたキリトは呆然とヴィクティムを見ていた。

「な、何を言ってるんだヴィクティム！」

「うるさい。ヒースクリフに追いつけないアンタは黙ってる」

「っ」

ばつさりと切り捨てると、ヒースクリフとの会話を続ける。

「アンタが契約を守るつもりが無かったなんてどうでもいいんだよ。僕とアンタは契約を結んで、一回こっきりとはいえ攻略組を手伝ってやった。だから、アンタには僕を殺してもらおう」

「ふむ、一理ある。が、私にその契約を守る理由は無。既にHPもキリト君に合わせてしまっているからね」

「うん、だからアンタに不利な条件が無いようにしてあげるよ」

そう言っってヴィクティムが提示した条件は、ヒースクリフにとつてのデメリットがほとんど無いものだった。

提示したのは二つ。

一つはオーバーアシストの常時使用。最も、これに関しては元より二人の契約に入っていたようなものだ。ヒースクリフのオーバーアシストの存在を知らなければ、そもそも契約を結んでなどいない。もし戦うことになれば、むしろヴィクティムの方から使うように言っていた筈なのだから。

しかし、誰もが驚いたのはもう一つの条件。

「さつき解除してた不死属性、僕と戦ってる間はつけてていいよ」

勝つつもりが無い。死ぬためだけに戦うヴィクティムでなければ出ない言葉に、さすがのヒースクリフも言葉を失う。

「僕以上の硬さ、僕と同じくらいの速さに加えて、減らないHP。これだけあっても僕と戦うのは嫌なのかな、魔王さんは」

「……ふ、よかろう。その条件で、君を殺すまで戦おうじゃないか。キリト君との仕切り直しはその後で行おう」

「いいじゃん、魔王。そうこなくちやね」

キリトとの戦闘の前に行った操作で不死属性を付与し、オーバーアリストを常時使用できるよう自身の設定を変更する。

もはやプレイヤー同士が決闘ではない。これではただの処刑だ。アスナを始めとして、親交のあるエギル、誰かを犠牲にするようなやり方を嫌うクライン、血盟騎士団のメンバーが止めろと叫ぶ。

そんな中、蹴り飛ばされた姿勢のまま、砕けて消えた剣があった左手を見つめていたキリトとヴィクティムの視線が合った。

無言のままの二人は、ヴィクティムがふいつと視線を逸らすまで視線を合わせていた。

「ああ、そうだ。ついでに、あの黒いのも麻痺にしておいてよ。割り込まれても嫌だし」

「そうだな……それでは始めようか。どこからでもかかってきたまえ」

「それじゃあ、遠慮なく」

誰の意志も意見も置き去りにして、二人の戦いは始まる。

最後かもしれない戦いの前哨戦。人生最後の戦闘。最速のプレイヤーと、最速になれるゲームマスター。

理不尽で、不条理で、互いの望む処刑が始まった。

塊のような白銀がヒースクリフを襲う。正面から襲い掛かるそれは、絶影の二つ名を持つヴィクティムが放つ最速の連撃。縦横無尽に煌めく剣閃がヒースクリフの盾に弾かれ、次の瞬間にはもう一度ぶつかる。

マシンガンのように絶え間なく響く衝撃音。

もはや叫び声も静止の声も無く、麻痺で動けない彼らが思うのは一つだけ。

ヒースクリフの不死属性が無ければ、あるいは。

元よりソードスキルを使わないヴィクティムには決まった型が無い。茅場がデザインしたソードスキルは体の自由を奪われる感覚がするから、という理由で使用しなかった経緯がここにきて開花していた。

ただ気になるのは、60層のフロアボスを殺し、ラフコフ討伐の際にPoh相手に見せた、全方位攻撃をしていないこと。速度の檻で囲むあの攻撃は、ヴィクティムの代名詞である速度を十全に生かしたものだ。

目の前のヴィクティムの戦い方は、まるで誰かの真似をしているような。それでいて、自身の長所を活かすような。そんな戦い方だ。

「ほう、確かにこれは、アシストが無ければ防ぎきれなかったな」

「防いでるばつかじゃ殺せないよ?」

「そうだな。では」

ガン、と大きく刀を弾くと一転攻勢に出るヒースクリフ。

オーバーアシストによる速度限界はヴィクティムの速度と同等らしく、避けるヴィクティムと防ぐヒースクリフの攻防は拮抗していた。

「認めよう、ヴィクティム君。この世界での最強は君だ。魔王の私より、勇者のキリト君より、君は強い」

「そりゃどーも」

「ユニークスキルはある意味チートだ。私がデザインしたスキルではあるが、たった10種類しか存在せず、その全てに役割が与えられて

いる。しかし君は、この世界のルールに則ったまま最強の地位まで上り詰めた。私はねヴィクティム君、心から君に敬意を表する」

「開発者様にそう言われれば悪い気はしないね」

目にも留まらぬ速度の攻防は、剣を交えて互いを吹き飛ばしたところで停止した。僅かに剣が触れたのか、金糸のような髪がはらはらと落ちる。

まるで少女のようなヴィクティムが衝撃を殺すために曲げた膝を伸ばして立ち上がった。その小さな体には幾つもの赤いダメージフェクトが走っており、直撃すればHPが全損するのは確実なのが見て取れる。

ヴィクティムの望む死はすぐそこだ。今までの彼ならば、笑いながらヒースクリフに向かって行くだろう。

しかし、今の彼は笑うことも無く、時折どこかを気にするかのような素振りを見せる。

死以外の何かを気にして殺し合いに向かう姿は、らしくないと言う他ない。

「さて、そろそろ最後といこうか。アンタはこの後も戦うんだし」

「それはそうだが、君はいいのかね？」

「ん、まあ十分楽しんだしね。この世界に来て、自分の足で走ることができた。最後の最後でいい人に出会えた。伝言も伝えだし、後悔も何もない。残せるものは受け取ってもらえたみたいだし」

倒れたまま苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるキリト。今にも泣きそうな表情でヴィクティムを見つめるアスナ。それ以外の倒れ伏した攻略組の面々を見て、ヴィクティムは口にする。

元より死ぬつもりであったが、最後に十分に楽しんだ。元々悔いはなかったけれど、満たされていたはずの心を満足させることができた。

ここに来てよかったと。

ナーヴギアを被ってよかったと。

希望に救われたと。

あまりにも救いの無い希望を叶えるために生きてきた少年の吐露。

こんなにも絶望に満ちているというのに。聞くだけで心臓が締め付けられるような言葉なのに。年端も行かない少年が口にするには、余りにも重い言葉だというのに。

その言葉を聞いた全員が、希望に満ちている言葉だと感じてしまった。

感じてはならない筈の感情を抱かせたヴィクティムは、死ぬ直前の人間とは思えない程に美しい笑みを浮かべて駆けだした。

白銀の刀を手に、魔王の元へ一直線に。最短距離を、最速で。尾を引く金と浅葱と白銀を残すそれは、少年のラスト・ラン。

現実で一度救われ、最初の絶望が霞と思うほどの絶望を味わい、誰もが絶望と感じた世界で希望を見出した少年の最後の拍動。

その姿から僅かに視線を逸らしたヒースクリフは瞠目する。ヴィクティムの左側から迫るアスナの姿を視認したからだ。

他のプレイヤーの麻痺はまだ効いている。なぜ一人だけ。まさか。そんな思考が一瞬で廻ると、新たな光景に移り変わる。

剣も握らずに向かってくるアスナの胸に、見覚えのある白い刀があった。

「なっ、きやつ!?!」

ヴィクティムには劣るものの、攻略組で最速だったアスナの動きが急停止する。

原因は手に持っていた刀を抜き身のまま向かってくるアスナに投げつけたヴィクティム。刃が剥き出しになったそれは、ふわりとアスナの腕の中に納められた。その際、僅かに刃が触れたのか、アスナのHPが1ドット減り、ヴィクティムのカーソルがオレンジになる。

全員が動けない中ただ一人、要求値ギリギリだった刀を捨てたことでさらに速くなったヴィクティムが加速する。

繰り出したのは、ただ速いだけの蹴り。左足を軸に、鞭のように放たれた右足は呆気なく盾に防がれた。

「――さらばだ、ヴィクティム君」

紅の鎧を身に纏う魔王は、最強のプレイヤーだった少年の最後の攻撃を受け止める。

そして、十字剣に紅の燐光を纏わせて、笑みを浮かべた。

「———楽しかったよ、ヒースクリフ」
さようなら。

瞬間二連撃のソードスキルを防ぐ術を持たないヴィクティムの体に、十字の傷が刻まれる。

死ぬ直前に放った言葉は、開発者冥利に尽きるものだった。最後の最後まで楽しませてくれたヴィクティムに、ヒースクリフは、茅場晶彦は笑みを浮かべる他なかった。

アスナの目の前で、唯一の希望を叶えた生贄を名乗る少年が弾け散る。

ゲームマスターのように全知全能ではなく。ソードアートオンラインを開始する前からゲーマーだったわけでもない。あくまでも他のプレイヤーと同じ、ただその身に宿した歪んだ希望に向かって走り続けた少年は、最後の最後でこの世界のすべてを理解して、必要なものだけを残して、自らの望みを叶えて死んだ。

美しく舞うポリゴン片に少年の意志は既に無く。

残ったのは勇者と魔王。そして、最後に必要なピースである白銀の刀だけだった。

9話 絶望

12

その後のことを、ヴィクティムは知らない。死んでその場から退場したのだから当然ではあるが、彼の予想通りになったのかどうかにすら興味は無い。

その場に崩れ落ちたアスナからヴィクティムの遺品である菊一文字則宗を受け取ったキリトが、死闘の果てにヒースクリフを打倒したことも。

SAOクリアと共に崩れ落ちるアインクラッドを眺めながら茅場晶彦と対話したキリトとアスナのことも。

現実に帰還した後も目を覚まさない300人のプレイヤー達のこととも。

その黒幕を知って救出する為にキリトと風林火山、エギルにリズベット、そしてアスナが奮戦したことも。

その末に、生き残ったSAOプレイヤーが全員解放されたことも。全てはどうでもいいことなのだ。

天宮遥の分身であり、もう一人の彼だったヴィクティムはあの世界で死んだのだから。現実世界と死だけが繋がった仮想世界で、世界の創造主にして魔王だった騎士に殺されたのだ。

その事実が覆ることは無い。

あの場に居た全てのプレイヤーが証人だ。

だからこそ、これは悪夢だと思った。そう考えて然るべきだった。鋼鉄の浮遊城で剣を握った。誰にも追いつけない速度を手に入れて、幾度となく死闘を繰り広げ、その度に相手を殺し尽くし、最後に全てを清算して死んだ筈なのだ。

なのに、何故。

二年間開かれることのなかった重い瞼。力の入らない手のひら。苦しい程に乾いた喉からは、ひゅうひゅうと呼吸音が抜けていく。

ぼやけた視界に映ったのは、あの世界と変わらない姿形の彼女の姿。その後ろに控えている白い服を着た男性は、二年前に仮想世界に

閉じ込められる直前に見た医師だろう。

何故。

その疑問に答えられる者は存在しない。

だが、自問するだけの少年にはわかっていた。

あの騎士は。魔王は。創造主は。最後に自分を殺してくれた感謝すべきクソ野郎は、約束を破ったのだと。

怒りは湧かなかった。

ただ、目の前の現実を処理するので精一杯だったからだ。

「遥君……」

明日奈の後ろに居た倉橋医師が瞼を開けてから動かない遥の頭からナーヴギアを外す。二年間処理されることのなかったトウヘッドのブロンドがはらりと落ちる。腰まで伸びたブロンドヘアはべたついてはいるものの、不快になるような異臭はせず、むしろ甘い香りがあるようだった。

久しぶりに肌で感じる空気は冷たく、換気の為に開けた窓から流れ込んでくるようだ。ぼやけていた視界も徐々に鮮明になって、久しぶりに見た景色に僅かな懐かしさを感じる。

ああ、帰ってきてしまった。

生きて戻ってきてしまった。

違和感を覚えて、右足を触る。布団の中で触れた右足は太腿の半ばから無くなっていった。ベッドに預けた背には、最早慣れてしまった小さな感触が残っている。

呆然としていた遥の表情が歪む。

ようやく晴れた視界は水中のように滲んで、乾ききった喉を震わせ、走る痛みを気にも留めずに絶望を吐き出した。

「い……ね、なか……っ、た……」

SAOから生き延びて帰還してきた彼らは一様に喜びを露わにしていた。

死の危険がなくなったからか、SAOでの出来事を懐かしむように口にして、とあるプレイヤーはあの世界の出来事を本にしているという。

どんな形にせよ、彼らは生きて帰還できたことが嬉しくて仕方が無いのだ。

対して遙は全く逆の反応を見せる。

「し……いた、か……った……」

死ねなかった。死にたかった。

二年間思い描き、願い続け、叶えたと信じた絵空事は空を切り、三度目の絶望に少年の心は完全に砕かれた。

涙を流し、慟哭しながら両手でそれを握る。

不自然に沈んだブランケット。本来なら右足があるそこには、何も無い。

ああ、忌まわしくも懐かしい体よ。戻ってくるつもりはなかった傷だらけの体よ。ヴィクティムと共に死ぬはずだった、失うばかりだった哀れな体よ。

ただいま。

そして。